

国際企画展示「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」に関する事業・研究報告

Project / Research Reports of International Special Exhibition
"Gaya: The History of Co-Existence in Ancient Asia"

NITO Atsushi, MATSUGI Takehiko, UENO Yoshifumi, TAKATA Kanta

仁藤敦史・松木武彦・上野祥史・高田貫太

はじめに

本稿は、2022年10月4日（火）～12月11日（日）に国立歴史民俗博物館（以下、歴博）において開催した国際企画展示「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」における事業・研究報告である。本展示は歴博、韓国国立中央博物館（以下、韓国中央博）、九州国立博物館（以下、九州博）との共催である。

展示開催に至るまでの経緯、特に韓国中央博との協議過程を通時的にまとめる（第1節）とともに、歴博に所属する展示プロジェクト委員による加耶に関する論考と史料集（第2～6節）を提示することを目的とする。

第1節 展示開催に至るまでの経緯

韓国中央博からの共催打診 韓国中央博では、2019年12月3日（火）～2020年3月1日（日）まで、特別展「加耶の本質—剣と琴—」を開催した。朝鮮半島南部に位置した古代社会である加耶の実像について、最新の調査・研究成果に基づいて構成された展示であった。韓国の歴史を総合的に展示する韓国中央博において、加耶を真正面から取り上げた総合展示は、実に30年ぶりであった。

韓国中央博における展示開催の1年前、2018年12月に韓国中央博から歴博に対して、共催についての公式的な打診があった。その意図は、日本列島の古代社会（倭）ともつながりが深い加耶の歴史を、日本に暮らす、もしくは日本を訪れる人びともにも紹介したいという意図であった。

歴博における展示開催の意義 歴博と韓国中央博は、長年にわたって学術交流協定を締結しており、2014年度には国際企画展示「文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—」を共催するなどの実績、相互の信頼関係が打ちかわれていた。また、当館においては、総合展示第1室（先史・古代）の新構築事業（2019年3月にオープン）や、諸々の共同研究において、先史・古代の日本列島と朝鮮半島の交流史についての研究や展示を推進していた。

特に総合展示第1室の新構築においては、先史・古代の国際交流が主要なテーマのひとつであったため、加耶の歴史や加耶と倭の交流史を展示することについては、重要な意義があった。そのた

めに韓国中央博からの共催の打診を受諾し、2020年7月に歴博で展示を開催し、その後、九州国立博物館（以下、九州博）に巡回することが決定した。

展示における歴博の主体性 ただし、韓国中央博の展示の単なる巡回展示となることは避け、歴博におけるこれまでの日韓交流史の研究内容も反映させるために、以下の2点を韓国中央博側に提示し、受諾された。

- ① 展示資料は韓国中央博の展示資料の中から歴博が選定すること。また、歴博側が加耶と倭の交流史の紹介に重要と考える国内の資料（例えば沖ノ島祭祀遺跡奉獻品の複製品など）についても一部展示すること。
- ② 展示や図録の構成は、韓国中央博の展示内容に沿いつつも、歴博が再構成すること。その内容を韓国中央博に適切に提示すること。
- ③ 図録の後半部に展示プロジェクト委員による論考を掲載すること。

その他に費用分担などについても合意に至り、2019年度から本格的な展示準備を開始した。

コロナ禍による延期 展示の共催が確定した後、韓国中央博の展示の見学、展示意図のヒアリング、歴博における展示資料の選定、展示や図録の構成についての協議など、展示準備は韓国中央博の全面的な協力の下、急ピッチに、そして順調に進んだ。そして2020年3月初頭には、展示に関する協約書を締結する直前までに至った。むろん、図録の作成や、展示設計も大詰めを迎えていた。

しかし、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大のため、展示開催を延期せざるを得なくなった。両館ともに休館を余儀なくされたこと、海外渡航が著しく制限され、展示資料の日本への運搬に随行する韓国中央博のクーリエの来日が不可能になったこと、そして開催を強行しても多くの方々に展示をご覧いただけないこと、が主な理由であった。文字通り、苦渋の決断であった。展示予定資料は、韓国各地の30をこえる所蔵機関に返却された。率直に述べると、展示の中止も覚悟した。

展示開催に向けての協議の再開 延期の決定から1年3ヶ月後の2021年6月、日韓においてコロナ禍による活動自粛や渡航制限が徐々に緩和されつつあった頃、展示開催に向けての協議を再開した。歴博と九州博における企画展示の予定を調整した結果、2022年10月～12月に歴博、2023年1月～3月に九州博、そして2023年4月～6月に韓国国立金海博物館という日程で展示を開催していくことで合意した。合意の背景に、当初の意図通り、日本に暮らす、もしくは日本を訪れる人びとに加耶の歴史、加耶と倭の交流史を紹介したいという、日韓の関係者の決意があったことは記しておきたい。

開催日程の合意を見た後、展示準備を再開した。すでに延期前に展示構成、図録の執筆・編集はほぼ終了していたため、韓国中央博との協議事項は、展示資料の確定や、資料運搬のための諸々の手続きが主であった。展示資料については、韓国中央博に、18機関にもものぼる韓国各地の所蔵機関に対し、改めて借用依頼を行っていただいた。その依頼に対し、所蔵機関の側も積極的に応じていただいたようで、早々に歴博側の希望する展示資料の多くが、借用可能となった。

図録をめぐる ただし、図録についての協議が難航した。それは、韓国中央博で開催した特別展「加耶の本質」の中に加耶と倭の交流史の描き方について、韓国世論の一部に否定的な反応が見られたことに起因する。その反応は、『日本書紀』は偽書であり、それに基づいた歴史叙述は全否定

すべきだ、というもので、学術的には到底受け入れられるものではない。けれども実際には、韓国の一部の新聞では、日本における展示開催について中止すべきだ、という論調で、歴博における展示開催が紹介されることも少なくなかった。当時、日韓関係は戦後最悪と言われるほどに悪化しており、そのことも遠因となっていた。それに対して、韓国中央博がやむを得ず対応する必要が生じたのである。

韓国中央博の展示担当者は、そのような残念な状況にあることを、歴博側の展示代表者の高田に伝えてくれた。そして、歴博が作成する図録の中に、日本書紀に基づく歴史叙述、というよりも「任那」という語彙が載っているだけで、揚げ足取りをされる懸念があること、そうなると、韓国社会の中で日韓共同の展示開催の意図がゆがめられてしまう危険性があることを、率直に、そして非常に申し訳なさそうに語った。

そのような情報提供を受けて、図録後半部に論考を執筆していた歴博内の展示プロジェクト委員と対応を協議した。その結果、図録後半部の論考については、図録への掲載を取りやめて、歴博の研究報告に投稿することに決定した。これもまた、苦渋の選択であった。第2～6節に各自の研究内容を掲載するのは、以上の理由による。

展示開催の実現 図録内容について合意を得た後には、展示準備は順調に進んだ。韓国内における展示資料の集荷、日本への運搬、演習作業も無事に終えることができ、2022年10月3日（月）に内覧会を開催した。内覧会には韓国中央博の尹成龍館長にもご参加いただいた。尹館長はあいさつの中で、「両機関が準備を重ねてきた今回の展示が、新たな日韓交流の懸け橋になることを期待」している、と述べられた。

そして10月4日（火）から12月11日（日）に、歴博企画展示室Aにおいて展示を開催した。幸いにもマスコミに広く取り上げられ、好評を博し、最終的な入場者数は21497人に達した。

ここで、本展示の目的と、展示構成をまとめておく。

展示の目的 古墳時代の倭人社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産、金工技術、馬匹生産、灌漑技術、炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねたのが、朝鮮半島南部に位置する加耶であった。加耶の社会は、ひとつの政治体を形成することはなく、金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などのいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態と倭との交流史を、墳墓や集落から出土した考古資料の展示、最新の調査・研究成果に基づいた歴史叙述によって、新たに描きだすのが本展示の目的である。

展示・図録の構成

プロローグ 加耶とは何か

1章 加耶を語るもの

重厚で華麗な武装 豊かな鉄 加耶土器の美 壮大な王陵

2章 加耶への道

東アジアと海の道 墳墓からみた加耶 盟主としての大加耶 大加耶の飛躍

3章 加耶人は北へ南へ —4世紀

東アジアとのつながり 金官加耶と倭

4章 加耶王と国際情勢 — 5世紀～6世紀初め

大加耶の対外戦略 大加耶, 小加耶と倭

5章 加耶のたそがれ

強国のはざままで 滅亡まで

エピローグ 加耶史と現在

各論考・史料集の概要 最後に、次節以降の展示プロジェクト委員による論考の概要をまとめる。

仁藤敦史は、『日本書紀』に「任那」と表現された加耶地域の主体的な動向、例えば外交主体として周辺諸国からの領土的侵略を回避する動きなどを重視し、旧来の「任那支配」を前提とした国家成立史を再考する立場を取る。その立場に基づいて、『日本書紀』にみえる「任那」観、とりわけ「官家」, 「日本府」, 「調」などの諸概念を検討している。(第2節)

高田貫太は、近年の進展が著しい加耶に関する考古学的研究の成果に基づいて、加耶と倭の交流史を描いている。その中で、倭の朝鮮半島系文化の伝来の契機として重視される倭の朝鮮半島に対する軍事的活動を相対化する必要があることを指摘する。(第3節)

上野祥史は、東アジアにおける加耶の立ち位置を、中国や倭と対照させつつ概観する。中国中心の国際体制のなかで自らに有利な秩序を構築するという、倭に認められる対外戦略構想に対し、加耶は一定の距離を置いていたと想定する。そして、朝鮮半島において隣接する諸社会(百済, 新羅, 高句麗など)との相互関係の構築が、加耶の対外交渉の主たる目的であったと指摘している。(第4節)

松木武彦は、倭と金官加耶の交流を象徴する文物のひとつである、金海大成洞古墳群に副葬された銅鏃を分析する。そして、銅鏃には、倭王権を核に授受された「威信財」として理解できるものと、いわば東海・瀬戸内東部—金海をつなぐような「民間」の流通網の中で伝来したものという、二者が存在することを指摘している。(第5節)

そして仁藤敦史が、韓国・中国・日本の古代史料のうち、加耶地域の国名や地名が網羅されているものを中心に史料集を作成した。(第6節)

以上の論考・史料集が、加耶の歴史、倭と加耶の交流史を追究するための一助となっていれば、幸いである。

(高田貫太)

第2節 加耶と倭国の交流史

はじめに

本稿では『日本書紀』に「任那」と表現された加耶地域の主体的な動向を重視し、『日本書紀』の「任那」観を内在的に明らかにしたうえで、旧来の「任那支配」を前提とした国家成立史を再考したい。従来の枠組みでは、統一的な外交権を有する「大和朝廷」が、高句麗・百済・新羅という三国を交渉相手と考えるものであった。すなわち、近代国民国家の枠組みを前提とした「一国史」の克服は必ずしも十分なされておらず、歴史的に形成された国家・国民・国籍・国境などを暗黙の前提とする議論であった。統一的な外交主体を描く『日本書紀』および三国を主体にした『三国史記』を前提とする枠組みであったと評価することもできる。

しかしながら、最終的には中国にも朝貢するようになった加耶地域の国家的成熟を前提に、外交主体として周辺諸国からの領土的侵略を回避する動きや、倭国内部の筑紫・吉備などの地域勢力による独自の朝鮮諸国との多元的外交は、これまで等閑視されてきた。

本稿ではこうした観点を重視し、『日本書紀』にみえる「任那」観、とりわけ「官家」「日本府」「調」など時期を異にしてあらわれる諸概念を検討したい。

1 任那との「交通」

まず倭国と「任那」の交流の歴史を概観しておく[仁藤 2013]。「任那」とは加耶地域に対する『日本書紀』が用いた広域地名表記で、その内部は金官国・安羅国・加羅国などの有力国を含む小国群から構成されていた。ただしこれら諸国がどのようなまとまりを有していたかについては議論があるが、諸国の利害は必ずしも一致せず基本的には分裂的であったと考える。『日本書紀』継体8年3月条に「伴跋築_二城於子吞_一・帶沙_二，而連_二満奚_一，置_二烽候_一・邸閣_二，以備_二日本_一」とあるように513年以降、己汶・帶沙の百済領有をめぐって、倭国に敵対した伴跋=加羅と、以後も倭国に融和的であった安羅のように統一的行動はとっていない。

これら諸国は、西の百済および東の新羅からの領土的併合の圧力を受け続けたため、5世紀後半には諸国の政治的結合が強化され、479年には中国南朝の南斉に「加羅国王荷知」が遣使し、「輔国將軍本国王」の官爵を得ている（『南斉書』東南夷伝加羅国条）。伽耶諸国は自己の独立維持のため高句麗との交通（487）、新羅との婚姻同盟（522～529）など周辺諸国への援助をしばしば要請し、その動きの一つとして倭国への「乞師」（529）なども行われた（『三国史記』新羅本紀、『日本書紀』顕宗3年条・継体23年3月是月条・同4月条など）。ただし、任那王の称号が具体的にいずれの国王を示すかは必ずしも明らかではない。

倭国との交流は古くから存在したと考えられ、とりわけ金官国は考古学的知見によれば北九州や大和・河内との交流が4世紀以前から知られ[朴天秀 2007]、「広開土王碑文」によれば400年の段階では「任那加羅」や「安羅」に倭兵の出撃拠点が存在したことが想定される。伝承的だが『日本書紀』崇神65年7月条に「任那国」から使者が来朝したことが見え、垂仁2年是歳条にも「意富加羅国」との交渉記事が見えている。さらに神功46年3月乙亥条には「卓淳国」を介しての百済国との交渉が開始されたことが記載されている。

倭国との交渉の重点は、残された史料に拠る限り5世紀には加羅＝大加耶や安羅国に移る。442年に比定される神功紀62年条所引の百濟記壬午年条によれば葛城襲津彦（沙至比跪）が「加羅」を攻めたとあり、直後の451年における倭王済の諸軍事号請求に「任那」から分化して「加羅」の称号が初めて見えるようになる（『宋書』倭国伝）。464年に新羅が「任那王」に救兵を求めた時、「日本府行軍元帥」（膳臣・吉備臣・難波吉士）とともに高句麗と戦うとの伝承があり（『日本書紀』雄略8年2月条）。『三国史記』新羅本紀には倭兵記事が500年まで見えること、一方で513年以降、己汶・帯沙の百濟領有をめぐる、伴跋＝加羅は倭国に敵対するようになること、などからすれば加羅や安羅がこの頃まで倭兵による新羅への出撃拠点として機能していた可能性が指摘できる。『南齊書』東南夷伝加羅国条には「加羅国、三韓種也。建元元年、国王荷知使来献。詔曰、量、広始登。遠夷洽化、加羅王荷知款、関、海外、奉、贄東遐。可、授、輔国將軍、本国王。」とあり、479年には中国南朝の南齊に高霊と考えられる「加羅国王荷知」が遣使し、「輔国將軍本国王」の官爵を得たともあり、中国により冊封されたことも国家的な成熟を示している。

6世紀になると509年に倭臣久羅麻致支彌が「安羅」と推定される「任那日本国邑」へ派遣された記事があり（『日本書紀』継体3年2月条）。さらに529年にも近江臣毛野の「安羅」への派遣記事があるように（『日本書紀』継体23年3月是月条）、倭国との親密な関係は継続する。

こうした地域には倭人が多く居住し、5世紀後半において交易・外交・軍事などを契機として派遣された豪族らと現地女性との間に生まれた「韓子」「韓腹」と称される混血が多数存在し、倭から派遣された官人が長期に「任那」に居住したともある〔仁藤2004〕。

さらに韓子や韓腹のなかには、紀臣が「韓婦」を娶ったために、百濟に留まり、百濟の高官になったとか、佐魯麻都は、「韓腹」で加耶で勢力を誇ったと伝えるように、倭系百濟官人や倭系加耶人として活躍する者もいた。とりわけ九州の在地豪族出身でありながら百濟の高官となり、大伴金村を「我が君」と呼び、敏達に対百濟策を献策した日羅はそうした倭系人の典型である。こうした記載によれば、当時において厳密な国籍を想定することはあまり意味がなく、加えてその国籍と政治的立場は必ずしも一致しなかった。

『隋書』百濟・新羅伝によれば、百濟には新羅・高句麗・倭・中国系の人々が、新羅にも中国・高句麗・百濟系の人々が居住し、国際化した状況が確認され、「任那日本府」の記載もこうした前提で議論する必要がある。

2 任那の「官家」・「日本府」・「調」

『日本書紀』にあらわれる「任那」について記述は、「官家」・「日本府」・「調」さらには「復興」をキーワードにしている。さらに、重要なのは、これらの概念が、官家は神功紀、日本府は欽明紀、調・復興は敏達～孝徳紀を中心に記述されていることである。

任那官家 『日本書紀』にみえる「屯倉」と「官家」の字音表記が、同じ「ミヤケ」と表記されていることは重要である。「ミヤケ」という共通する訓を重視するならば、両者を包括した概念としてミヤケを定義する必要がある。『日本書紀』における「官家」という用字は、配下の人間集団に対して貢納奉仕を内容とする支配の拠点に対して用いられたのであり、領域支配や農耕の拠点とは異なる内容が確認される。『日本書紀』は加耶諸国を一体のものとして記述し、これを「官家」と

表現して隷属の対象としている点は、国際意識や政治的イデオロギーに関連するものであることは注意すべきである。『古事記』仲哀段に「渡屯家」とあるのが貢納奉仕の支配拠点の意味を示す正しい古い用例と考えられる。

したがって「官家」は倭王から土地・人民を封建された国主が、貢納物を貢上することで、その独立的な支配が「附庸」として許される関係を示す。直轄地のような領土的支配ではなく、間接的な君臣関係による支配が「官家」の本質であった。そのため朝貢物の定期的な進上が重要であり、その官家の「再興」が調物の貢上により果たされる関係となる。

任那日本府 加耶諸国の国家的な成熟および倭系人の居住という状況において、『日本書紀』の欽明紀には倭人系の活動組織として「任那日本府」という表現が見える。近年では、『日本書紀』が構想する朝鮮半島南部における領域支配の拠点としての「任那日本府」という議論は明確に否定されている。しかしながら、その実態については、加耶諸国の独立性・主体性を認めたくえて、倭国からの臨時の使者あるいは軍事外交使節として位置付ける見解および在地性が強い倭人集団と位置付ける見解およびその折衷説などが比較的有力であるが、多様な見解があり、必ずしも通説と呼べるものは形成されていない〔李 1993, 中野 2004, 森 2010, 仁藤 2013〕。

「任那日本府」の前提として、雄略期以降に大王雄略の採用した親百済・反高句麗・新羅路線とは異なる、紀氏（北部加耶）や吉備氏（南部加耶）のような独立勢力が存在し、加耶の在地勢力と提携して侵略的な百済に対抗して、反百済・親高句麗・新羅的な活動をしていたことが確認される。

いわゆる「任那日本府」の構成は多様で、的臣のような「卿」「大臣」などと表記される派遣使者たる倭臣、吉備臣のような雄略期以来の「在安羅諸倭臣」あるいは「執事」と表現された人々、および阿賢移那斯・佐魯麻都を典型とする金官国あるいは安羅国などの在地系の人の三つの集団から構成された。これらが一括して「任那（安羅）日本府」と表現されたのは、加耶侵攻に対して安羅王とともに親新羅・高句麗的活動をした諸集団を一括して、対立的に百済系史料（百済本記）が本来的に表現したものである。現地倭系集団のまとまりを、ヤマト王権が使者を派遣することにより短期間、外交的に利用しようと試みたのが実態に近く、少なくとも恒常的な外交機関とはいえない。

倭系百済官僚 継体朝から欽明朝にかけて集中して見えるようになる倭系百済官僚も同様な存在であり、『日本書紀』の編纂材料となっている百済系史料（百済三書）においては、親百済的であれば百済の官位を与えられ倭系百済官僚となり、反百済・親加耶的存在であれば、抵抗勢力として「任那日本府」として表現されたものと考えられる〔仁藤 2018・2019〕。

倭系百済官僚の多くは初期には、县城以下の地方官僚クラス（六品相当の奈率）であった。『北史』百済伝に「奈率，六品。已上，冠飾銀華」とあるように、六品以上が上層官僚とされ、彼らはこの階層に含まれる高官であった。おそらく欽明期前半においては「任那問題」に関係した地方官僚が対倭国交渉に抜擢され、欽明期後半には倭系百済官僚の地位が上昇し五部名を付するようになるので、都下に居住する官僚として派兵交渉に従事したと考えられる。

百済や倭国の内部には、同盟的關係にはありながら、独自の活動を展開する勢力が存在した。それは全羅南道地域および筑紫国であり、独自の活動が確認される。少なくとも百済や倭国は、こうした独立的な勢力による独自の交渉活動を十分には統制できなかった。こうした勢力を領域内化す

ることが6世紀の政治課題として存在し、自己中心的な世界観の形成にも連動してくる。6世紀おけるこうした統合の動きは、両属的存在として活動していた倭系百済官僚の動きが、百済による日羅の殺害のように、やがて両国にとって矛盾的な存在として認識されるようになり、その帰属意識の明確化が求められたことや、百済と倭国関係の一時的な疎遠化などにより史料から姿を消していくことになったと想定される。

倭系百済官僚の活動時期については、日羅が安閑期に派遣されたことから6世紀以降と推定されることが多い。しかしながら、彼の父の名前「火葦北国造阿利斯登」は、半島系の名前であり、父の代から活動していたことが想定される。また、「斯那奴阿比多」は、単に「日本阿比多」とも表記されるので「斯那奴」は地名ではあるが、「科野直」のような氏姓が成立する以前の表記であり、5世紀段階にさかのぼる時期に半島に渡ったことが想定される。紀臣奈率弥麻沙についても母を韓婦とする二世であることからすれば、父の時代から韓半島との交渉があったことが指摘できる。雄略期から継体期にかけて、しばらくヤマト王権の外交的統制は弛緩するが、こうした時期に各地の豪族が氏族的利害により百済に渡り官僚化したものと推測される。

任那の調と任那復興 『日本書紀』によれば、新羅が金官四邑を占拠した後に、倭国は新羅に対して「任那の調」を要求するようになるが、新羅は限定的にしか対応しなかった。

575年の敏達による「任那復興」の詔には、「百済、使を遣して進調る。多きこと恒の歳より益れり。天皇、新羅の未だ任那を建てざる」とあるが、百済が常よりも多く調を貢上したのは、そこに「任那の調」が含まれているとの倭国側の認識を示すものと考えられ、それに対して新羅が任那を封建しないことが問題視されている。百済からも任那属賜＝加耶支配の進展＝安羅・加羅との一体化に対応した進調を倭国が要求したのと考えられる。百済や新羅からの通常よりも多いと表現された進調（敏達4年2月乙丑条・同6月条）には、「任那の調」が含まれていたことになる。この後も敏達と崇峻により「任那復興」の詔が出されているが、「任那復興」の内実はそれぞれ百済と新羅への強硬的な政策である。日羅の具体的な献策については、7世紀の実例（皇極期の太子翹岐と大佐平智積の来倭、孝徳紀の巨勢大臣による舟を並べる威嚇策、天智期の壱岐対馬に置かれた防人）と細部まで対応するものが多く、潤色と考えられる〔仁藤2022〕。

崇峻期には、二万余の軍を筑紫に駐屯させて、使者を派遣し、新羅に圧力をかけることがおこなわれている。この段階では、すでに具体的な半島への派兵による積極的な任那の復興策ではなく、両国に軍事・政治的な威圧を与えることで、百済または新羅から「任那」の貢納物を納めさせることに主眼が置かれるようになっている。

「任那復興」とは、倭王に承認された任那王による間接統治（任那官家の設置）を前提に「任那の調」を納めさせる関係の回復であり、「任那」滅亡後にも相互に「任那」の使者が派遣されるように、虚構として新羅または百済により仕立てられた任那の使者が倭国へ共同入貢し、定期的に貢納物を倭国に献上することができれば、満足されるものであった。

推古8年には、新羅と任那が衝突したので、万余の軍を派遣して、任那のために新羅を討伐したと記載される。新羅と任那の王が貢調して服属を誓ったが、將軍を帰還させると、再び新羅は任那に侵攻したとある。しかしながら、征討將軍任命→遣使→進調→新羅による再侵攻という一時的な任那復興は、『三国史記』には記載がなく、新羅と任那の紛争も不自然な記載であり、この記事は

そのままでは信用できず、潤色の可能性が高い。

ここでは「任那」という国や「任那王」の存在が明記され、これ以後「任那使」が独自に調を納める新たな形式が定着することと表裏の関係がある。新羅が562年までに西方に領土を拡大した結果、当初の「金官四邑の調」に限定されない、より広い「任那の調」に再定義されたものと位置づけられる。

642年の百済による旧加耶諸国の奪取にもかかわらず、新羅による金官四邑の領有は解消されていない。にもかかわらず新羅からの「任那の調」が廃止されたのは、「金官四邑の調」よりも「任那の調」がより広域を対象としたためである。百済による旧加耶諸国の奪取により、新羅の不法占拠が解消したため、新羅からは「金官四邑」を除く「任那の調」が廃止されたと考えられる。その意味では、532年の国境を前提とする「金官四邑の調」と562年の国境を前提とする「任那の調」が区別され、「金官四邑」は広義の「任那」から分離され「金官四邑」は新たに新羅領として扱われたことになる。これは562年の「任那滅亡」を記した『日本書紀』欽明23年正月条に金官国を除く10国が当時の任那のすべてとされていることや、同継体21年6月甲午条にみえる新羅に破られた南加羅（金官）と喙己吞を区別して任那に併合させるという認識と同じである。明らかに『日本書紀』編者の任那認識は、新羅と百済の領有関係の変化にともない、狭義の任那を示す、当初の「金官四邑」を中心とするものから（『日本書紀』崇神65年7月条）、「金官四邑」を除く10国に重点が変化している（『日本書紀』の加耶諸国全体を任那とする認識はここに由来する）。

したがって、いわゆる「任那四県」は、百済が奪取した「下韓」「南韓」の内部に比定される。馬韓地域は文化的にも加耶諸国とは別地域であり、『日本書紀』でも神功紀50年条に「平定海西。以賜百済」「皇太后勅云。善哉汝言。是朕懷也。増賜多沙城。為往還路」とあるように、馬韓地域（全羅道）は、「多沙」までが「東韓」とセットで「海西諸韓」として本来的に百済の領土として扱われており、広義の任那には含まれないと考える。

その後、大化元年7月丙子条には、大化期における「任那」政策の変化を示す記載がある〔仁藤2010〕。

「始」「中間」「後」という三期区分による「任那」認識は、あくまで『日本書紀』の認識であり史実とは同じではないが、支配層の外交的な認識を考える場合に前提となる記載である。とりわけ「中間」において百済へ任那を属賜した時期（実質は百済による加耶支配の進展）については、末松保和以来、百済が洛東江西岸地帯を奪還した642年とする見解が通説となっている〔末松保和1949〕。

しかしながら、それより以前の6世紀前半から、任那の四県を「今百済に賜りて、合せて同じ国とせば」（『日本書紀』継体6年12月条）、「己汶・帶沙を以て、百済国に賜う」（同7年11月乙卯条）、「（多沙）津を以て百済王に賜う」「果たして夫余（百済）に賜う」（同23年3月是月条）などの記載があるように、倭国が「任那四県」や「多沙津」を百済（扶余）に「属賜」したことが明記されており、これ以降の段階に比定することができる。

欽明4（543）年の百済王による上表には「爾^{イマシ}屢^{シバシバ}表^{フミ}抗^{クテマツ}りて、当^{マサ}に任那を建つべしと称^イうこと、十余年なり」とあり、百済王による「任那」再建の献策は543年よりも「十余年」前、すなわち『三国史記』新羅本紀が記す、法興王19（532）年の新羅による金官国の滅亡以降のこととなる。

おわりに

『日本書紀』におけるこうした「任那」認識を敷衍するならば、「乙巳の変」における「三韓進調」と崇峻暗殺における「東国調」献上というクーデターの場の共通性が指摘される。こうした対外的な儀礼には必ず大王・大臣が出席すべき儀式との認識が指摘できる。大王による御覧、国名を付した調、前提としての領域確認、など両者に共通する要素は多い。『日本書紀』の認識では、「東国」と「三韓」が同質な支配方式により経営すべき対象とされていたことを重視するならば、内政と外交という二分法的な理解を相対化する素材となる。

一方、『日本書紀』における「三韓認識」は、基本的に奈良時代以降も継続し、百済・高句麗・任那を不法占拠したと理解して統一新羅をイデオロギー的には承認せず、白村江の戦いにおける百済復興、百済王族の亡命、渤海の高句麗継承意識、藤原仲麻呂による新羅征討計画などに色濃く反映することとなったと考えられる。

(仁藤敦史)

参考文献

- 末松保和 『任那興亡史』吉川弘文館、1949
池内宏 『日本上代史の一研究』中央公論美術出版、1970
仁藤敦史 「文献よりみた古代の日朝関係」(『国立歴史民俗博物館研究報告』110, 2004)
仁藤敦史 「五世紀以降の倭と朝鮮の国際関係」(人間文化研究機構連携展示企画展図録『アジアの境界を越えて』国立歴史民俗博物館、2010)
仁藤敦史 「孝徳期の対外関係」(『東アジアの中の韓日関係史－半島と列島の交流－』上巻, J & C, 2010, 韓国語)
仁藤敦史 「『日本書紀』の「任那」観－官家・日本府・調－」(『国立歴史民俗博物館研究報告』179集, 2013)
仁藤敦史 「『日本書紀』編纂史料としての百済三書」(『国立歴史民俗博物館研究報告』194集, 2015)
仁藤敦史 「倭系百済官僚の基礎的考察」(『日本古代の氏族と政治・宗教』下, 雄山閣, 2018)
仁藤敦史 「倭・百済間の人的交通と外交－倭人の移住と倭系百済官僚－」(『国立歴史民俗博物館研究報告』217集, 2019)
仁藤敦史 『東アジアからみた「大化改新」』吉川弘文館、2022
朴天秀 『加耶と倭』講談社、2007
李永植 『伽耶諸国と任那日本府』吉川弘文館、1993
中野高行 「『日本書紀』における「任那日本府」像」(三田古代史研究会編『政治と宗教の古代史』慶応義塾大学出版会、2004, 2007に加筆し韓訳)
森公章 「五世紀の日韓関係」(日韓歴史共同研究委員会『第二期日韓共同研究報告書』第一分科会篇, 2010)

第3節 考古学からみた倭と加耶のつながり

はじめに

倭と加耶のつながりは、古代東アジアの中でも最も緊密だったと評価できる。本節では古墳時代のはじまりから加耶の滅亡までの交渉史を概観する。

1 国際的な交易拠点の形成と展開

九州北部の国際的な交易拠点—西新町遺跡 古墳時代を迎えた3世紀後半になると、九州北部の玄界灘沿岸に大規模な交易拠点が整備される。博多湾沿岸の砂丘域に形成された、福岡市西新町遺跡である。その特徴は、朝鮮半島系の厨房施設たるカマドの導入と普及、大量の朝鮮半島系土器の搬入、日本列島各地（畿内、山陰、瀬戸内など）からの外来系土器の集中などがある。

カマドや炊事用の半島系土器、その模倣土器の存在は、西新町遺跡に朝鮮半島の各地から多くの人びとが渡来し、たとえ短期間であっても在地の人びとと「雑居」していたことを示す。また、西新町遺跡から出土した大型の板状鉄斧、ミニチュアの鉄器、鉛板、ガラス小玉の鋳型などからみて、渡来人たちは当時の先進的技術をたずさえていたと考えられる。そして、西日本各地の土器が集中することからみて、先進文物や技術を求める列島の人々もまた多く集まっていたと考えられ、まさしく日朝両地域の人びとが交易を重ねる国際的な港津であったと評価できる。

古金海湾とその周辺の港津 西新町遺跡が国際的な港津として機能した3世紀後半から4世紀初頭にかけて、狗邪（金官）国が位置した朝鮮半島東南部、古金海湾一帯やその周辺にも、大規模な港津が展開する。それを物語る代表的な遺跡として東萊貝塚や金海官洞里・新文里遺跡がある。そして、狗邪（金官）国の中枢とされる金海鳳凰洞遺跡も、古金海湾沿岸の最奥の中央部という良好な立地にある。これまで確認された掘立柱建物（倉庫？）、木柵、準構造船の部材などから、港津の存在を想定し得る。

その中で、古金海湾の具体的な港津や、その運営にかかわった集落の姿を描くことができる遺跡群が調査された。それが金海官洞里・新文里遺跡である。まず、官洞里遺跡は古金海湾の西側沿岸に面していたと考えられており、三国時代から統一新羅時代にかけての多様な遺構が確認された。特に古金海湾へつながる道路や倉庫群、棧橋施設が注目され、当時の船着場と倉庫群がセットをなす港津の様相が明らかとなった。また、新文里遺跡は官洞里遺跡を見下ろすことができる丘陵の平坦面や斜面に広がる集落遺跡で、官洞里の港津を管理、運営していた集団の集落である。新文里遺跡からは土師器系土器が少なからず出土しており、交易にたずさわった倭人集団の存在が考えられる。

狗邪（金官）国の基盤 官洞里・新文里遺跡からやや内陸へ入ると、官洞里古墳群や良洞里古墳群、良洞里山城、4、5世紀代の製錬炉や鍛冶炉などが確認された余来里遺跡や荷溪里遺跡など鉄生産に関連した工房などが分布している。これらの遺跡は、古金海湾沿岸の西部において有機的に結びつき、狗邪国の対外的な交渉拠点のひとつとして機能するようになった可能性が高い。4世紀以降、古金海湾一帯では鉄生産と海上交易が一体として運営されており、それを管轄していたのは狗邪国の中枢であった。このような経済的な基盤を背景として、狗邪国は金官加耶を主導する金官国とし

て成長を遂げる。

連動する港津の形成 これまで、博多湾沿岸と古金海湾沿岸における国際的な港津の形成についてみてきた。港津や工房がセットとなった交渉の拠点が整備されたという点においては共通しており、相互に連動した動きであったと判断できる。

その背景としては、倭の側には各地における朝鮮半島東南部の先進文物や技術を求めるさらなる動きや、中国外交を重視する倭王権と対外活動に秀でた福岡平野地域との関係があった。一方で狗邪（金官）国の側には、鉄生産と海上交易を一体的に運営し、鉄を求める倭との活発な交渉を通して金官加耶へと成長を遂げていく動きがあった。

2 交渉の多角化と半島情勢

金官加耶と倭王権 3世紀後半以降、国際的な港津としてにぎわいをみせていた西新町遺跡であるが、4世紀に入ると急速に衰退し、4世紀後半には集落自体が消滅してしまう。この頃には、西日本各地で地域間の交渉の拠点となっていた集落も衰退に向かっていくことが指摘されている。すなわち、倭の側においては、博多湾沿岸を起点とする対朝鮮半島交渉の様態に大きな変動があったようである。

一方で、古金海湾沿岸とその周辺に目を向けると、西新町遺跡とは対照的に4世紀に入ると、さらなるにぎわいをみせる。そして、金官加耶圏の最上位集団の墓域たる金海大成洞古墳群を中心に新たな倭系文物が副葬されるようになる。それは、盾や矢を収納する鞆に飾りとして取りつけたと考えられる巴形銅器や、鎌・紡錘車・筒などを模した碧玉（緑色凝灰岩）製品、そして銅鎌などである。その副葬は大成洞13号墳など遅くとも4世紀前半から確認でき、4世紀後半頃に最も盛んになる。

このような文物は、その授受や保有に政治的な意味合いが含まれた器物（威信財）としての性格が強く、倭王権と金官加耶の直接的な外交が軌道にのったことを示している。

沖ノ島祭祀 また、玄界灘に浮かぶ孤島の沖ノ島が、4世紀後半までには本格的に海上交通に関わる祭祀場として機能するようになる。その代表的な事例のひとつが沖ノ島17号祭祀遺跡であり、巨岩上において祭祀が行われ、祭祀具として玉類、石製腕飾類、そして三角縁神獸鏡などをはじめとする各種の倣製鏡が用いられていた。同時期の有力古墳の副葬品と共通する品々である。

このような動きも、金官加耶と倭王権（を構成する畿内地域の諸勢力）との直接的な交渉が本格化する中であらわれたものと考えられる。沖ノ島は地勢的にみると、博多湾を経由せずに畿内地域と金官加耶圏をむすぶ経路上に位置していることから、金官加耶との直接的な交渉をめざした倭王権によって海上交通の祭祀場として重視されたようである。

日朝交渉の多角化 このように4世紀後半には、金官加耶と倭の緊密な関係はピークを迎える。それとともに、日朝関係の動向を大きく左右する動きがあった。それは、百済が卓淳国（金官加耶圏の小国のひとつ、現在の昌原か）の仲介のもとで倭との正式な関係樹立を求めてきたことである。その経緯については、『日本書紀』神功46年3月条に描かれている。古代史においてその内容の信ぴょう性についてはおおそ認められており、高句麗との対立を深める百済が諸加耶や倭との連携を模索した動きとして評価されている。

また、洛東江以東地域（≡新羅圏）についても、慶州月城路古墳群で出土した土師器系土器や腕輪形石製品などを評価すれば、何らかの形で倭との交渉を模索していた可能性がある。近年では、慶州にほど近い蔚山下三亭ナ—115 石槨墓で倭系甲冑（長方板革綴短甲）が出土した。

このように4世紀後半以降の倭は、加耶のみならず百済や新羅ともつながり、多角的な交渉を重ねるようになっていった。

3 諸加耶の盛衰と倭

(1) 金官加耶の衰退と倭

金官国の動揺 これまで、金官国の王陵群である金海大成洞古墳群では、4世紀末～5世紀前葉ころの大成洞1号墳の造営を最後に大型墓の造営は途絶える、とみられてきた。その背景としては、広開土王碑碑文に記された400年の高句麗の金官国（任那加羅）への侵攻が想定されている。それによって、金官加耶が急速に衰退し、大成洞古墳群における大型墓造営の途絶した、という理解である。これは現在も一定の支持を受けている。

「倭賊」の性格について その際に日朝関係史の立場から今後も検討を深める必要があるのは、広開土王碑文に記された「倭賊」の実態である。これまでの日本古代史の研究においては、百済—加耶—倭という連携のもとで、百済や加耶の要請のもとで高句麗の南下へ対抗する意味合いで新羅に侵入した倭の軍勢と考えられている。

しかしながら、考古学的には倭がどれくらいの兵力を送ったのかについては不明とせざるを得ない。碑文が記す通りに、399～400年にかけて新羅（おそらくは慶州）に倭の大規模な軍勢が駐留していたとすれば、その期間は短くとも数ヶ月におよんだはずである。とすれば、それを維持するための兵站が必要だったはずである。

しかし、慶州やその周辺では発掘調査の蓄積が著しいけれども、いまだ多くの倭人が滞在していたことを示すような遺跡は確認されていない。現状の資料による限り、考古学的には新羅圏へ侵入し任那加羅へと敗退した倭の軍勢を、倭の総力を結集したような大規模なものと考え難い。筆者は、倭を主たる敵とするのが碑文の政治的意図であり、それゆえに倭の役割が非常に誇張されているという見解に共感を覚える。

また、近年の発掘調査によって、大成洞古墳群では高句麗の南下の後にも、それまでの規模ではないとしても、墓の造営自体は継続していたことが明らかとなった。さらに、古金海湾周辺をみわたせば、各地の集団は中小の古墳群を造営し、活発な対外活動を展開している。主要な港のひとつ、官洞里遺跡も依然として機能し、須恵器系土器も出土する。

以上のような状況をまとめると、高句麗の南下によって金官国が大きく動揺したことは確かだが、532年の滅亡まで、南海岸航路と洛東江をつなぐ関門社会としての一定の勢力は保持していたようである。

(2) 大加耶の盛衰と倭

大加耶の台頭と倭 金官加耶の一時的な衰退と相前後して急速な成長をとげたのが、大加耶である。韓国考古学では、5～6世紀前半における大加耶様式土器の分布圏の形成と拡大、冠や垂飾付耳飾など服飾品の分布、各地域への高塚古墳の造営などから、洛東江西岸から蟾津江下流域に及ぶ大加

耶の社会統合を想定している。その成長は著しく、479年に南齊に朝貢し嘉悉王（荷知王）が「輔国將軍・本国王」に冊封される。また481年には、高句麗の新羅侵攻に対し百済と共に援軍を出している。

この時期、日本列島各地には大加耶系の垂飾付耳飾や帯金具、馬具、武器などがもたらされており、大加耶と倭の活発な交渉をつみ重ねていた。

対倭交渉の目的 大加耶が倭との交渉を本格化させた目的を考えるうえでカギとなるのは、おそらく百済と大加耶の関係である。百済は高句麗の南下に対抗するため、金官加耶や倭との同盟を結んでいたことはすでに指摘されているが、くわえて大加耶に対しても接近し、金工技術などを提供していたようである。大加耶にとっても高句麗南征への対応は必要なものであったから、百済と協調しながら倭に対しても友好的な関係の樹立に努めたようである。

5世紀の状況 大加耶の対倭交渉ルートについては、少なくとも5世紀代と5世紀末～6世紀前半の2つの時期に分けて考える必要がある。これまでの研究ではおおむね蟾津江を用いる経路と、南江を用いる経路の2つが考えられている。

ただ、5世紀後半までに大加耶が蟾津江下流域を安定的に管轄していたという状況は、考古学的には考えにくい。ある程度安定的に経路として活用できたのは、大加耶系の墓制を取り入れた順天雲坪里古墳群の時期から判断して、5世紀末から6世紀前半頃と考えられる。よって、蟾津江経路のみが大加耶の対倭交渉経路であったとは考えにくい。

南江経路と小加耶 南江経路沿いとその周辺には須恵器を中心とした倭系文物が点在しており、対倭交渉のルートとして用いられたと考えられる。ただし、それらを大加耶と倭の交渉の産物と即断してしまうことはできない。なぜなら、南海岸の固城や泗川（慶南西部）には小加耶が位置しているからである。倭系文物が副葬された古墳には、小加耶の土器も副葬される場合が多いので、小加耶の活動によって須恵器がもたらされたともみることできる。

ただ、小加耶と大加耶の関係、特に5世紀後半以降の関係は、固城松鶴洞1号墳に大加耶系の土器や装飾馬具などが副葬されており、基本的には協調的なものだったようである。小加耶は主体的な対外交渉の中で、大加耶王権の対外活動を仲介する役割を担っていたのではなかろうか。

洛東江経路 もうひとつ注目すべきは洛東江経路である。5世紀中後葉頃の倭系資料は高霊や陝川など洛東江や黄江沿いで確認されており、また陝川地域の対岸に位置する昌寧においても倭系資料は確認されている。垂飾付耳飾の分布も5世紀後半までは高霊や陝川などに限定されている。地理的にも、洛東江経路を用いた対倭交渉が行われていた可能性は高い。この場合、洛東江下流域東岸（釜山地域）において社会統合を進める新羅との関係が注意される。

5世紀末～6世紀前半の状況 次の段階、5世紀末～6世紀前半になると、倭系資料や大加耶系の垂飾付耳飾が南江に沿って確認されるようになる。この時期に大加耶系の垂飾付耳飾、特に山梔子式の耳飾が、北部九州地域や畿内地域を中心に分布する点から考えると、高霊—居昌—咸陽—山清—南江—晋州—固城—南海岸という南江経路が、大加耶の主要な対倭交渉のルートとして活用された可能性は高い。また、前時期と同様に洛東江経路も利用されていたようである。洛東江以東地域の昌寧や慶山、対岸の玉田でも山梔子式の耳飾が確認されている。洛東江下流域の昌原茶戸里古墳群でも、大加耶系の土器や耳飾が出土しており、大加耶が洛東江も対外活動に利用していた状況をう

かがうことができる。

510年代に起こった蟾津江流域の己汶や滯沙をめぐる百済との対立の末、大加耶は蟾津江河口への影響力を失うとされている。新羅の洛東江以西地域への侵攻も本格化し、532年に金官加耶が滅亡する。

このような百済との対立、そして洛東江下流域への新羅の侵攻に対応するために、大加耶が倭とのさらなる関係強化を模索したようである。そのために多様な交渉経路を駆使しようと試みたのではなかろうか。例えば、蟾津江を越えた麗水半島の鼓楽山城では、6世紀前半頃の大加耶様式土器が榮山江系の土器や百済の土器とともに出土している。大加耶が蟾津江ルートを完全に利用できなくなった、というわけでもなさそうである。また、522～529年には新羅と結婚同盟を結ぶが、そこに洛東江経路を利用しようとする大加耶の意図が垣間見えるという指摘もある。

以上のように、大加耶は、5、6世紀の流動的な政治情勢に対応しつつ洛東江経路や南江経路、そして蟾津江経路などを臨機応変に利用しつつ、対外交渉を行ったのであり、その主要相手として倭が存在していた。

滅亡直前の対倭交渉 おそらく大加耶は、562年の滅亡直前まで倭との交渉を積み重ねていた可能性が高い。近年、日本列島では、6世紀中葉～後半にかけて朝鮮半島系副葬品を豊富に副葬する有力首長墳が造営された状況が明らかとなっている。特に、朝鮮半島からの移入品、あるいは製作工人が倭に渡来し製作が開始された後でも定型化を認めにくい一群の副葬品の存在が目に見える。

その系譜は大きく2つに分かれる。ひとつは新羅との関わりの中で、製品が移入したか、製作工人が渡来した可能性が高いものである。もうひとつが、百済との関わりを考慮する必要はあるけれども、大加耶との交渉の中で移入された、もしくは製作工人が渡来したと想定できるものである。具体的には蛇行状鉄製品、朝鮮半島系冑（方形板革綴冑でその頂辺に金属製の冠帽や有機質装飾を載せて用いる冑）、そして馬冑である。三者がまとまって確認できるのは現状では洛東江以西地域（≡大加耶圏）である。また、概して新羅系馬具と評価される針葉形鏡板付轡や針葉形杏葉（宮崎県持田56号墳、大阪府海北塚古墳）や、三葉文環頭大刀（宮崎県持田28号墳）は、大加耶系工人による製作が指摘されている。

今後の課題 このように、朝鮮半島系の副葬品の系譜をみるかぎり、滅亡直前まで大加耶は倭とのつながりを持っていたようである。ただし、その対倭交渉の様態や目的を、具体的に考察するためには、529年の結婚同盟決裂から562年の大加耶滅亡を前後する時期の、新羅と大加耶の政治的な関係についての考古学的な理解を深める必要がある。特に、大加耶がいつ頃まで主体的な外交が可能であったのか、という問題について検討を深めなければならない。

(高田貫太)

参考文献

(日本語)

諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会
北九州大会実行委員会

李成市 1994「表象としての広開土王碑文」『思想』842 岩波書店

井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社

-
- 内山敏行 2011「毛野地域における6世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
金字大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭—新しい地域関係史へ』京都大学学術出版会
久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』53 - 4
高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書
武末純一 2009「三韓と倭の交流—海村の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』151
田中俊明 2009『古代の日本と加耶』日本史リブレット70 山川出版社
朴天秀 2007『加耶と倭』講談社
菱田哲郎 2013「古墳時代の社会と豪族」『岩波講座日本歴史第1巻 原始・古代1』岩波書店
(韓国語)
李熙濬 2017『大加耶考古学研究』社会評論
洪漣植 2014「洛東江河口地域の加耶文化」『加耶文化圏の実態究明のための学術研究』伽耶文化圏地域発展市長郡
主協議会

第4節 加耶と中国・倭の交渉 —記録と文物から—

はじめに

3世紀を前後する時期より、朝鮮半島南部の諸地域と日本列島は、国家形成へと社会統合の道を進んでいった。すべての社会統合が、新羅、百濟、倭のような、法による土地と人の支配が貫徹された古代国家に至るわけではない。加耶の諸地域はその一つであり、かつては国家形成史の視点で主体的には語られなかった。考古資料の蓄積は加耶を実態としてとらえることを可能にし、加耶史の認識を大きく進展させた。福泉洞古墳群、良洞里古墳群、大成洞古墳群の調査は、それを象徴している。加耶は、日本列島の諸地域にとり、対外交渉の直接窓口として早くから認識されてきた。多くの文物や情報は、朝鮮半島東南部の当地を介してもたらされたことは間違いない。故地や出自の異なる情報や文物の動きをみることによって、中国や倭など他の地域がこの地を如何に認識したのかがみえてこよう。外の眼で加耶をみることは、主体的な語りとは異なる、もう一つの加耶の姿をみることでもある。ここでは、中国と日本列島・倭の眼に映じた加耶の姿を、簡単に振り返ることにしよう。

1 中国史書と中国系文物

加耶地域のことが中国史書にみえるのは、後漢時代のことである(図1)。『後漢書』は東夷の諸韓が遣使したことを短く伝え、『後漢書』と『三国志』の東夷伝は諸韓の風俗習慣を詳しく伝えている。『晋書』では、3世紀後半の西晋期に東夷諸国が頻繁に遣使朝貢するものの、4世紀以後の東晋期には散見される程度にとどまる。『宋書』など5・6世紀の南北朝期の史書には、高句麗や百濟の遣使記事を頻繁に記しているが、加耶諸国の遣使記事は乏しい。加耶を記載したのは、『南齊書』東夷伝のみである。5・6世紀の中国を中心とした世界観では、南齊において他に加耶への注目はみられない。4世紀以後に、加耶-朝鮮半島東南部の情報は極めて少なくなるのである。

中国史書では、中国世界の関心に沿って東夷など周辺諸民族を取り上げている。紀元前後から6世紀に至るまで、東夷に関する記述は継続するのであるが、4世紀を境として記述内容に変化があらわれてくる。帝紀には一貫して遣使・交戦記事を収録しているが、『晋書』『宋書』『梁書』『魏書』等の列伝(東夷伝)には、遣使の詳細や除正された中国官爵、上表文や詔書などが詳しく記されている。過去の来歴や風俗・国勢よりも情報は多く、政治交渉の多寡が情報量に対応しているのである。倭についての記載が、遣使が頻繁であった宋朝一代に限り情報量が豊富なことから理解されよう。

4世紀以後に、加耶の記事が中国史書に極端に少ないのは、遣使等の政治交渉が低調であったことを反映している。4世紀に至るまで東夷諸国による遣使・内附の記事は頻繁にみえており、加耶の前身たる弁韓の名称はみえないものの、朝鮮半島東南部と中国との関係=政治交渉が展開していたようである。中国王朝と加耶、朝鮮半島東南部地域との関係では、4世紀初頭が一つの境をなしているといえよう。

中国系文物は、中国との交渉を反映するもう一つの物証である。嶺南地域に中国系文物が姿をあらわすのは、紀元前1世紀以後のことである。中国系の鉄製品は朝鮮半島南部に一足早く流入する

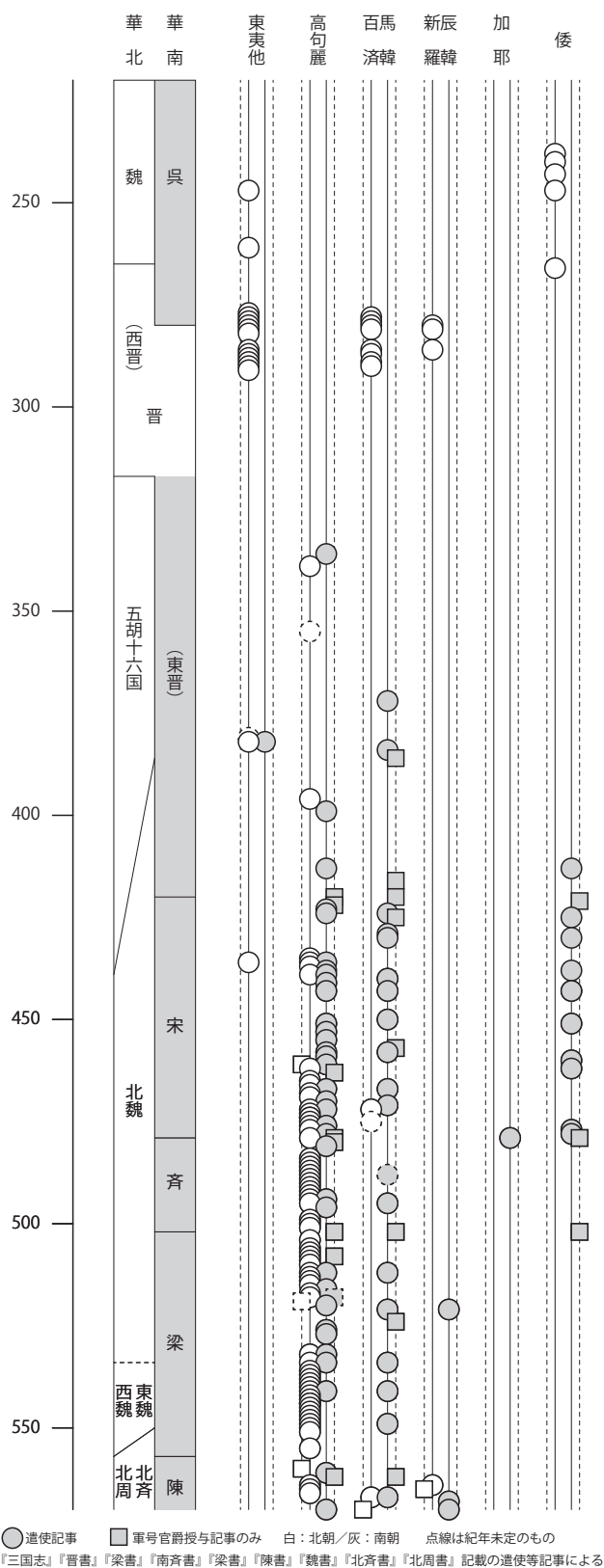


図1 東夷諸国と中国の関係

が、中原（中国王朝の中心区域）と同じ器物を共有するようになるのは、紀元前1世紀以後のことである。朝鮮半島南部に流入した中国系文物には、筆や銅鏡、鼎など青銅製容器、金銅製装身具や陶磁器などを挙げることができる。

昌原茶戸里遺跡の筆や鏡などはその嚆矢である（本展テーマⅡ展示）。朝鮮半島西北部に漢王朝の領域支配の拠点である楽浪諸郡が設置され、楽浪郡と周辺の諸韓との政治交渉を反映して中国系文物が流入した。なかでも、安邑宮銘銅鼎は、本来内郡の宮殿で使用された品であり、楽浪郡内で調達しうる品ではない。『後漢書』東夷伝には、王朝が夫余王に内外の諸侯が受けるべき玉衣を与えたとする記事があるが、それに近い入手状況が想定される。金海良洞里322号墓で出土した銅鼎も、地方政府と周辺民族との関係では完結しない、王朝の意図を反映した政治交渉が3世紀以前に展開していたことを示している。

4世紀の中国系文物には、金海大成洞88号墳で出土した金銅製装身具や金属製容器類などがある（本展テーマⅢ展示）。金銅製の馬具や金属製容器類は、前燕や高句麗など4世紀の東北アジアでも共有された器物でもある。金属製透彫帯金具は、王朝領域では折峰校尉や奉車都尉あるいは前將軍などが保有しており、前燕や高句麗の領域でも出土している〔町田2006〕。王朝の政治秩序を体現する金属製透彫帯金具は、周辺世界の統治階層も共有したのである。この器物を通じて、東夷諸

国が王朝の政治秩序のなかに間接的に位置づけられ、その一端が加耶にも及んでいたことを示している。5世紀以後の加耶地域では、目立った中国系文物がみられなくなる。百済や新羅のように、陶磁器やガラス容器、あるいは青銅・鉄製容器が流入する動きが、加耶の主要地域にほとんど見出せない。

なお、中国製の金属製透彫帯金具は、高句麗や新羅でも保有したが、その後の動きは加耶と一線を画した。高句麗や新羅では中国製の帯金具を模倣して独自の形を創出したが、加耶地域では中国系文物を受入れるにとどまり、独自の形は創出されなかった。中国系文物を利用した社会統合や首長間の連携が、5世紀以後の加耶地域にはみえないのである。

加耶地域、朝鮮半島東南部では、4世紀以前には中国系文物の流入をみるが、5世紀より後は皆無に近い状況となる。それは、3世紀後半の東夷諸国の遣使を最後に、加耶と中国との交渉がほぼみえなくなる文献資料に通じる状況がみえるのである。

文献記録と中国系文物という二つの「物証」は、中国と加耶の関係に4世紀が一つの境界をなしているように映る。金海を中心とした地域では、広域の物流ネットワークの結節点として、狗邪韓国から金官加耶へと政治体が成熟したと理解されているが、そこに中国との関係が作用したのは4世紀までということになる。それは、東夷諸国と中国王朝との交渉窓口であった楽浪・帯方故地が、4世紀初頭を境として晋から前燕・高句麗へと管理者が転換することと連動している。中国王朝の側でも、王朝が朝鮮半島に支配拠点を擁した3世紀までは、遣使・内附・交戦する韓が直接の関心対象であったものの、4世紀以後は関心の対象外となり直接の交渉も低調であったことと表裏の関係にあるのであろう。

2 倭系文物としての鏡

加耶の地は、西に馬韓・百済、東に辰韓・新羅、南に倭と隣接していた。陸路で百済や新羅と通じるのに対して、倭とは海路により通じていた。金海に限れば、海路は倭と中国につながる道であった。

倭との交渉は、文字記録と倭系文物という二つの物証に反映されているものの、同時代社会の文字使用の実態から、記紀の記載は直接援用することができない。ここでは、倭系文物の動きに絞って倭との交渉をみてみよう。

古墳時代には、地域社会を統合する動きが日本列島規模で展開していた。金海加耶の諸古墳で出土した銅鏃や巴形銅器などの倭系文物は、それを支えた首長連携ネットワークを媒介する器物であった。列島の外に広がる倭系文物は、倭と加耶との連携がどの地域を対象にどの程度の深度を以て展開したかを示す指標である。倭王権の主導勢力は、古墳時代を通じて変化するが、それに連動して交流の相手となる朝鮮半島の地域も、金官加耶、新羅、大加耶、百済へと変化することが指摘されている〔朴天秀2007、高田2014〕。一方で、文物のみならず、埋葬施設としての石室や日常土器などに、王権の関与とは別次元で生じた倭人の動きも見てとることができる〔高田2014〕。多元的に展開した倭との交流を、倭系文物は示しているのである。

首長連携ネットワークを機能させた威信財として、前期には鏡が、中期には帯金式甲冑が主要な座を占めた。加耶地域で出土する鏡や帯金式甲冑は、こうした連携の末端が朝鮮半島にまで及んだ

ことを示している。だが、器物の共有は倭への帰属を反映するものではない。流通の起点にある王権は、分与・分配の末端まで厳密に管理したわけではなく、間接分与を含む分与・分配が重層するなかで、緩やかな秩序体系が形づくられた。鏡や甲冑に投影された序列は、受領者の認識や承認にかかわりなく、秩序を機能させたのである〔上野2019〕。

倭系文物であっても、鏡と甲冑は同じではなかった。日本列島で首長連携ネットワークを媒介した文物の多くは、甲冑や馬具など朝鮮半島に起源をもつが、鏡は朝鮮半島に普及していない文物であった（本展テーマⅡⅢ展示）。三国時代、3世紀以後の朝鮮半島南部では、鏡は保有が限られる特殊な器物であり、鉄製甲冑や馬具のように、倭と加耶でひろく共有したものではない。鏡は、帯金式甲冑・馬具とは、系譜・性格が異なったのであり、より倭の色彩が濃厚な文物である。その流入には、倭の交流・交渉意図をより強く反映するものだといえよう。

古墳時代には、前期から後期に至るまで、中国鏡と倭鏡を対象として、鏡の分与・分配が続いた。朝鮮半島南部では、中国鏡と倭鏡が出土しているが、中国鏡には他の中国系文物・倭系文物を対照した流入経路の理解が求められる。この点で、加耶地域にとって、鏡は中国と倭との交流を示す、東アジア的な存在だともいえよう。倭鏡は日本列島から流入したことが確実な文物である。

朝鮮半島南部では、時期ごとに鏡を保有する地域が変化した〔上野2019〕。4世紀は金海周辺に限られ、5世紀前半は西南部沿岸地域と慶州に、5世紀後半には忠南・全南から慶州に至る広域に分布した（図2）。5世紀中葉まで、鏡は少なく、倭鏡は中国鏡よりも少なかった。中国鏡は中国（楽浪帯方故地）から流入が想定され、5世紀前半には倭と協同した中国（楽浪帯方故地）との交渉を反映して入手した想定されている。その理解は、4世紀に大成洞88号墳と新山古墳で金銅製龍紋透彫帯金具を共有している現象にも充てることができよう。帯金式甲冑と比較すれば、朝鮮半島南部での鏡の少なさ、普及度の低さはより際立つ。この時期に、鏡を媒介とした交渉・関係は低調であったと言わざるを得ない。

5世紀後半には、中国と倭から鏡が流入した。中国鏡は、南朝と関係をもつ百済とその近接地にほぼ限られる。鏡はより広域にひろがり、倭鏡は全南から慶南東部・慶北に及んでいる。質も量ともに、これまでになく充実をみせているのである。鏡の分布は倭の交渉が複数の地域を対象に多

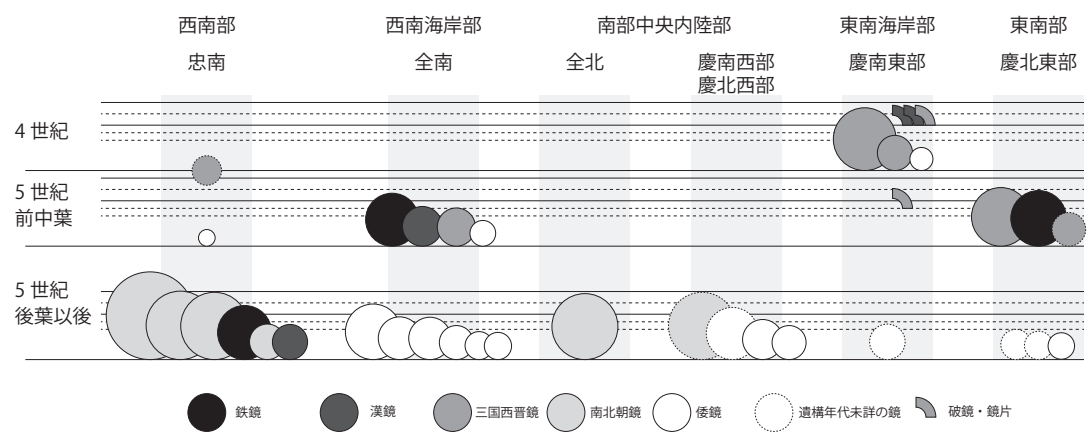


図2 朝鮮半島南部出土鏡の変遷模式図（面径縮尺統一）

面的に展開したことを反映するが、大加耶が新羅、百済あるいは倭と関係をもつように、加耶諸地域にみえた多面交渉と同様のものである。複雑な相互交流が、朝鮮半島南部で交錯していたことを示しているのである。鏡の数と大きさでみれば、全南・慶南西部が慶南東部・慶北よりも優位にあり、この西高東低の傾向は、倭と加耶との交渉が大加耶を中心に展開したことを反映する。

5世紀中葉に至るまで、鏡を媒介とする倭と加耶の交流は低調であった。当初より交易の窓口であった金海地域ですら流入が低調であることは注目される。これまでにない交流が広域にわたり展開した5世紀後半以後は、大きな画期であったといえよう。しかし、それは決して太いつながりとはいえず、あるレベルでの関係にとどまった。いずれも中小型鏡であり、江田船山古墳や藤ノ木古墳の被葬者などが手にした20 cmを超える大型鏡が、一貫して加耶地域にはもたらされていないからである。

倭系文物の動きから、倭の交渉が金官加耶から大加耶そして百済へと転換し、日韓双方の政権中枢の交代と連動していることが早くから説かれているが[朴2007, 高田2014], 時期とともに対象とその深度を変えたことが鏡の流通から見出せるのである。

なお、鏡は、古く楽浪を起点として中国から倭へと流入したが、韓と倭の鏡保有は古墳時代以前から対照をなしていた。鏡の分布は、中国と倭が直接交渉したことを物語る。中国と韓、中国と倭は、交渉経路を共有しつつも、交渉は独立して進行していたのである。中国から金官加耶を目指す動きと、中国から倭を目指す動きが、すべて重なるわけではない。逆に、金官加耶が中国を目指す動きと、倭が中国を目指す動きも連動するとは限らない。日本列島と中国との関係は、加耶の媒介・仲介を必須とするものではないことも示せるのである。

おわりに

金官加耶では、鉄製武装具を創出し、大加耶では冠や耳飾、装飾付大刀などを創出し、それを共有する首長の連携ネットワークを機能させ、社会統合を進めた。そこに、中国系文物を模倣するという動きは見出すことができない。馬具にせよ装身具にせよ、金属製容器にせよ、中国系文物はそのまま受容するのみであり、それを改変させた独自の形を創出するには至らなかった。新羅の帯金具や百済の装飾付大刀のように、加耶では中国系文物や倭系文物などの外来器物を改変し活用することはなかったのである。ここでは、隣接地域と共有する器物、あるいはその影響を受けた器物を志向する加耶の動きがみえてくる。隣接諸地域で共有した権威の形のなかに、加耶の自己主張が表現されたといつてよい。

このことは、隣接地域間の相互作用のなかで、加耶の社会統合・連携が意識されたことを示しており、権威の源泉が中国あるいは倭などとの対外交渉にないことを示している。倭では、中国や朝鮮半島との対外交渉が首長間連携を主導する権威の源泉として働いたが、そのような形態は、中国系文物や倭系文物の動きをみる限り、5世紀以後の加耶の諸地域には見出せない。むしろ近接する諸地域関係のなかで主導性を志向する社会であったととらえたい。それこそ、4世紀以後の中国史書の記述と表裏の関係にあるのだろう。

加耶が中国を志向しない社会であったとみれば、中国王朝への唯一の遣使である大加耶王荷知による南斉への遣使も、475年の漢城陥落と百済の熊津遷都という国際事情を反映した特殊な事例と

して、自律的な中国遣使でないとの評価も可能である。

中国と倭の二つの視点から、加耶の対外交渉を、隣接する他地域と対照しつつ概観してみた。中国を盟主と仰ぎ、その国際体制のなかで自らに有利な秩序を構築する戦略構想には距離を置き、隣接する諸地域の相互関係に専心した加耶の姿がみえてくるように思う。

(上野祥史)

引用文献

- 上野祥史 2019「朝鮮半島南部の鏡と倭韓の交渉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集, pp.291-317.
高田貫太 2014「古墳時代の日朝関係-新羅・百済・大加耶と倭の交渉史-」吉川弘文館
朴天秀 2007「加耶と倭-韓半島と日本列島の考古学-」講談社
町田章 2006「鮮卑の帯金具」『東アジア考古学論叢-日中共同研究論文集-』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所, pp.45-62.

図出典

図1: 筆者作成

図2: [上野2019] より引用

第5節 加耶と倭の銅鏃

はじめに

古墳時代の加耶と倭の間には、盛んな人の往来と、さまざまな文物や情報の交換があった。加耶側からみると、5世紀末～6世紀初頭にかけて、前方後円形の墳丘や土製樹立物が、倭に由来する要素として馬韓（榮山江流域）の有力者の墳墓に表れた。それに先立つ5世紀の中頃から後半には、大加耶（洛東江中流域）の墳墓群を営んだ有力者集団のもとに、鉄製甲冑などの倭製の武器が集まった。さらに古い4世紀前半から5世紀初頭にかけては、洛東江下流域の金官加耶（駕洛国）に、有力者の威信を示す青銅製品や碧玉製品が集中し、それらの多くは倭との深い関係をみせる。

このような加耶と倭との交流史の背景に迫る第一歩として、ここではその最初の焦点となった金官加耶に焦点を当てる。そこに集まる品のうちでも、とくに銅鏃を取り上げ、当時の加耶と倭との関係を具体的に探るための手掛かりとしたい。

1 倭の銅鏃

銅鏃とは、青銅製の矢じりである。中国の戦国時代から漢代まで主要な武器として用いられた。断面が紡錘形の「両翼式」と三角形の「三翼式」とがあり、紀元前3世紀の弥生時代中期中葉に日本列島に伝わった。紀元後1世紀以降の弥生時代後期には、両翼式の系譜を引くものが列島で広く生産されるようになり、鉄鏃とともに主要な武器として行きわたった。鉄鏃に対する数の相対比は、九州では低く、近畿・中部・関東では高い[大村1984]。鳥取県の青谷上寺地遺跡では人骨に刺さった例があるなど、鉄鏃を補完する実用武器として使われた。

古墳時代が始まる3世紀中頃、弥生時代のものとは一線を画した精製の銅鏃が、有力者の墳墓に副葬されるようになる。そのおもな特徴として、①型式の数が増えるので、銅鏃全体としては形が多彩になる(図1)。②けれども、一つの型式内の個体差は縮小して細部まで規則が守られるので、型式間の境界はきわめて明確になる。この点で「規格的」といえるのである。③錫を多く含む良質の青銅素材で作られ、錫の少ない弥生時代後期のものとは、質感や遣りの良さが明確に異なる。④先端が横一直線に作られたり丸みを帯びたりするものがあるなど、刺突武器としての実用的機能が

形状	有茎								無茎				
	放射稜	縦稜				縦横稜		横稜	三叉稜		縦稜	縦横稜	
		逆刺なし 隆被なし	逆刺なし 隆被あり	逆刺あり 隆被なし	逆刺あり 隆被あり	逆刺なし	逆刺あり		鋭角	鈍角			
図解													
タイプ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
通称	円柱	柳葉		腸袂柳葉		十字鎬柳葉		鑿頭	定角		無茎定角	無茎三角	
基本形	断面円形	断面菱形						断面長方形			断面扁平		

図1 古墳時代銅鏃の諸タイプ

薄い。

以上の特徴から、古墳時代の銅鏃は、実戦用武器というよりは象徴的な品物と意識され、そのように取り扱われたものと考えられる。弥生時代の銅鏃の延長ではなく、製作の段階から、形についての新しい範型（作る人の頭の中にある完成形のイメージ）とそれを守る強い意識、および研磨整形などの高い技術をもった工人の組織が、新しい原材料を供給されて強固な体制を作り、そのもとで生産が始まったと推測される。さらに、分布状況から、その生産体制の最大の中心の一つは、近畿地方中央部の大和にあった可能性が高い。

いっぽう、その「消費」は、もっぱら古墳への副葬である。そのパターンは3つある。第一は、同型式多数が、精巧な矢筒（鞞）に入ったり束になったりして古墳の埋葬施設に副葬されているもので、これをパターン甲とする。第二は、それに加えて別型式の1～数本が「少数派」として伴うもので〔杉山1980〕、これをパターン甲+乙とする。第三は、この1～数本だけが、一つの埋葬施設に副葬されるもので、パターン乙とする。

いま、傾向をみるため、かりにパターン甲（同型式多数）の本数を10本以上として、各古墳の埋葬施設からの出土本数を型式ごとに整理した表1により、各パターンの存在比、および墳丘規模との関係を、まずは倭の事例で調べてみた。その結果、古墳の墳形・規模・埋葬施設ならびに銅鏃の型式と本数が共につかめる87例のうち、パターン甲はわずか15例であるのに対し、パターン甲+乙は26例、パターン乙は47例にのぼる。墳丘規模との関係をみると、パターン乙の47例中90%に当たる43例が、円墳や方墳ならびに後円部・後方部径50m未満の中小の前方後円墳・前方後方墳であるのに対し、同型式多数を受容しているパターン甲およびパターン甲+乙の合計41例中39%に当たる16例が、後円部径50m以上の大型前方後円墳である。

これらのことは、倭においては、銅鏃は1～数本の少数で流通する場合が大半であったが、とくに階層的上位の有力者間においては、同型式が多数まとまった形でやり取りされる傾向が強かった状況をうかがわせる。詳細は別稿に譲るが、本稿では、以上のことを念頭に置いて、加耶から出土した銅鏃とその背景を吟味する。

2 加耶の銅鏃

以上のような倭の古墳時代銅鏃の類品が、加耶からも出土している（表1上端3例）。倭の2,300本台に対して50本台という少数ではあるが、加耶と倭の交流を反映する重要な資料である。その確かな例として詳しい報告がなされているのは、金官加耶（駕洛国）の大成洞108号墳の47点、同88号墳の5点、および、卓淳国とされる昌原の三東洞甕棺墓から出た2点である。これら加耶の銅鏃が、倭の古墳時代銅鏃とどのような関係にあったのかを考えたい。

大成洞108号墳の銅鏃 2020年に発見された事例で、上記のパターン甲（同型式多数）に属するが、明確な墳丘をもたない木槨墓からの出土である。出土した47点は東になっており、いずれも、逆刺と篋被をもたない「柳葉」（図1のタイプB）である。

表1に明らかなように、この型式は、倭の古墳時代銅鏃総数の54%を占める主流タイプである。さらに、逆刺と篋被の有無にかかわらずに「柳葉」および「腸扶柳葉」全体（表1のタイプB・C・D・E）を数えると倭で70%にのぼり、古墳時代銅鏃総数の3/4近くが「柳葉」および「腸扶柳葉」で

あったことがわかる。倭王権膝下における銅鍔の生産と供給の中枢に立っていたとみられる奈良県の桜井市メスリ山の236本はすべて「柳葉」、天理市東大寺山古墳の261本がいずれも「柳葉」と「腸挟柳葉」とに限られる事実は、これらの型式すなわちタイプB・C・D・Eが、倭王権から支給される「威信財」として絶対的スタンダードのパターン甲であったことを示す。これらに含まれるタイプBを47本まとまってパターン甲としてもつ大成洞108号の被葬者は、加耶独自の墓制を遵守する当地の有力者であった一方で、倭王権を核とする上位の有力者の政治的関係に参与した人物であったと考えられる。

なお、大成洞108号の47本のタイプBは、この型式が出現当初にもっていた規格性が崩れ、鍔身下縁が水平（鍔の主軸に対しては直交）の直線を描いたり、鍔身の最大幅が下端部に来たりするものを含み、かつて筆者がこの型式の銅鍔の変化を4つの段階に分けたうちの「第Ⅲ段階」に相当する[松木1992]。倭での類例は、奈良県新沢500号・佐味田宝塚および岐阜県遊塚など、いわゆる前期末葉ないしはそれに近い時期の古墳に集中する。このことは、大成洞108号の年代を考える上で重要となろう。

大成洞88号墳の銅鍔 次に、大成洞88号墳の5点を見よう。3点は「無茎三角」のうち縦横に直交する稜をもつタイプである（図2-3～5、図1-タイプM）。これは列島でもきわめて稀で、墳墓

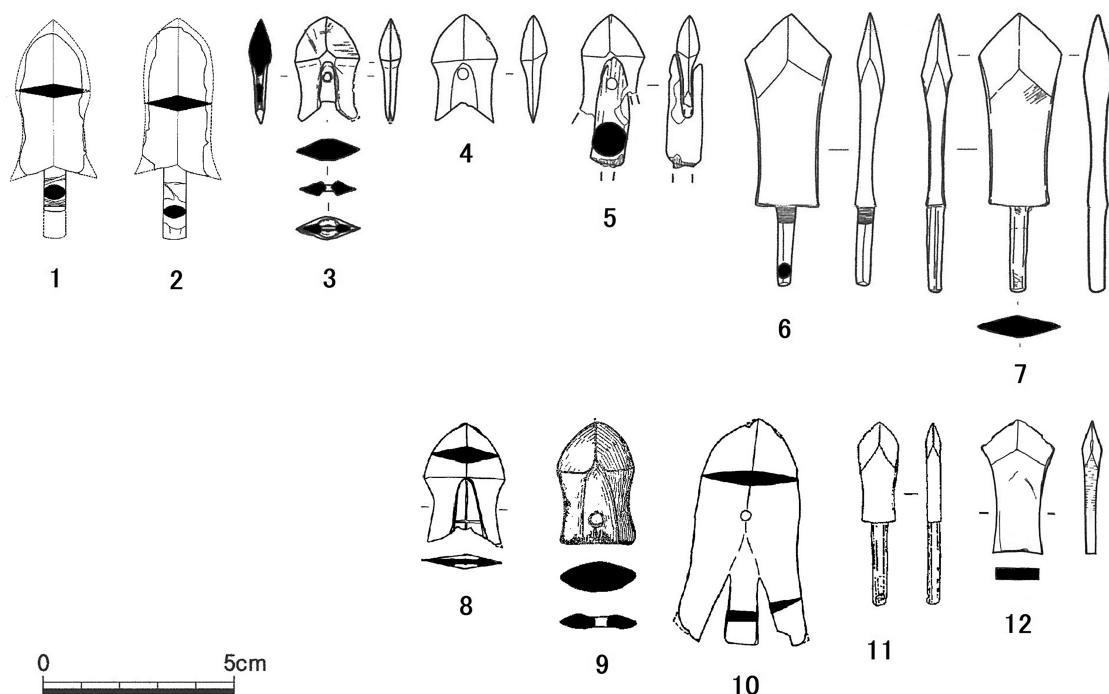


図2 加耶の銅鍔と倭の関連資料

1・2 昌原三東洞甕棺墓 3～7 大成洞88号墳 8・10 福岡県五島山古墳
 9 長野県神稲村 11 兵庫県聖陵山古墳 12 岡山県浦間茶白山古墳
 [安1984, 大成洞古墳博物館2015, 亀井1970, 永峯1952, 第18回播磨考古学研究集会実行委員会2017, 近藤・新納編1991]

表1 古墳時代銅鏝タイプ別出土一覧

古墳名	所在	墳形	墳丘規模	柳・室・被覆	棺	銅鏝のタイプと各出土点数														備考	
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	他		不明
三東洞	韓国			甕棺					2												
大成洞 88号	韓国			木槨	木棺									2				3			
大成洞 108号	韓国			木槨	木棺		47														
五島山	福岡	?	?	なし	箱式石棺													5	3		
卯内尺	福岡	前方後円	45 (73)	竪穴式石室?	木棺?		1														
阿志岐 B26号	福岡	方	20	なし	割竹形木棺		14		3	10									2		
潜塚	福岡	円	30	なし	箱式石棺		43			1			2								1
石塚山	福岡	前方後円	70 (120)	竪穴式石室	割竹形木棺		1														
竹島御家老屋敷	山口	前方後円	38 (56)	竪穴式石室	木棺?		24														2
柳井茶臼山	山口	前方後円	50 (80)	竪穴式石室	木棺					1											
大迫山第1号	広島	前方後円	27 (46)	竪穴式石室	箱形?木棺											6					
石鐘山第1号	広島	円	20	竪穴式石室	割竹形木棺		5														
朝日谷2号	愛媛	前方後円	16 (26)	なし	木棺		42		1	1											
国分	愛媛	前方後円	25 (44)	竪穴式石室	木棺?		約10			約30											総数 34
片山3号	愛媛	円	?	なし	箱式石棺		1														
吉岡神社	香川	前方後円	24 (51)	竪穴式石室	木棺?		5														
猫塚	香川	双方中円	45 (96)	竪穴式石室	?		9														
岩崎山4号	香川	前方後円	38 (62)	竪穴式石室	割竹形石棺			5													
富丘頂上	香川	円	15	竪穴式石室	木棺?											2					
愛宕山	徳島	前方後円	44 (64)	竪穴式石室	木棺		3			1			1								4
大代	徳島	前方後円	45 (54)	竪穴式石室	舟形石棺		3	3													
一宮天神山2号	岡山	前方後円	37 (>60)	竪穴式石室	木棺?		10														
浦間茶臼山	岡山	前方後円	81 (138)	竪穴式石室	割竹形木棺		3	2						15							
用木1号	岡山	円	30	なし	割竹形木棺		37														
花光寺山	岡山	前方後円	59 (96)	なし	組合式石棺		17														
月の輪	岡山	円	60	粘土被覆	木棺		80														
奥ノ前	岡山	前方後円	37 (65)	?	長持形石棺		1?														
西野山3号	兵庫	前方後円	20 (40)	なし	割竹形木棺		1														3
権現山51号	兵庫	前方後方	24 (43)	竪穴式石室	舟形?木棺		2		4												
御旅山3号	兵庫	?	?	なし	割竹形木棺				1?		1?		1?								
松田山	兵庫	円	?	竪穴式石室	木棺?		1	5													2 不明2は柳葉
聖陵山	兵庫	前方後円	45 (78)	竪穴式石室?	木棺?									7							
天坊山	兵庫	円	16	竪穴式石室	箱形?木棺		3														
				竪穴式石室	箱形?木棺		1														
滝ノ上20号	兵庫	方	20	竪穴式石室	木棺?		6														1
大部	兵庫	円	?	なし	木棺?					2											
粟生三ツ塚	兵庫	円	15	?	?		2														
森尾	兵庫	?	?	竪穴式石室	?		>3	>2													もと9点
夢野丸山	兵庫	前方後円	30 (60)	竪穴式石室	?		9			20			2								
弁天山 C 1号 (前方部)	大阪	前方後円	47 (73)	粘土被覆	割竹形木棺		31														
將軍山	大阪	前方後円	80 (110)	竪穴式石室	割竹形木棺		>3														総数 16点
藤田山	大阪	前方後円	15	粘土被覆	木棺?		>5														
お旅山 (伝出土含む)	大塚	前方後円	27 (45)	?	?		20			1	2										4
庭鳥塚	大阪	前方後方	16 (56)	粘土被覆	箱形木棺		41														13
甘山	大阪	前方後円	20 (48)	なし	木棺								有								
玉手山3号	大阪	前方後円	60 (100)	竪穴式石室	割竹形?石棺		11						1								
玉手山4号	大阪	前方後円	?	なし	木棺		3														6
玉手山10号	大阪	前方後円	33 (49)	竪穴式石室	木棺		4						1								
松岳山	大阪	前方後円	72 (150)	竪穴式石室	組合式石棺																2
楽音寺西ノ山	大阪	前方後円	30 (70)	竪穴式石室	?		2					4	3								もと58点
和泉黄金塚	大阪	前方後円	57 (94)	粘土被覆	木棺			1													
貝吹山	大阪	前方後円	75 (130)	竪穴式石室	刳抜式石棺		2		6		1										3
左坂B2号	京都	円	18	なし	箱式石棺		2		1												
岩滝丸山	京都	円	30	なし	組合式石棺					14											2
園部垣内	京都	前方後円	50 (82)	粘土被覆	割竹形木棺		2	2								4					3 4
瓦谷	京都	円	30	なし	木棺		1														
椿井大塚山	京都	前方後円	110 (175)	竪穴式石室	割竹形木棺											17					
美濃山王塚	京都	前方後円	60 (75)	?	?					2											
西山2号	京都	方	27	なし	割竹形木棺																1

古墳名	所在	墳形	墳丘規模	柳・室・被覆	棺	銅鐏のタイプと各出土点数														備考	
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	他		不明
元稲荷	京都	前方後方	51 (94)	堅穴式石室	割竹形木棺														1		
寺戸大塚(前方部)	京都	前方後円	54 (98)	堅穴式石室	割竹形木棺								10							3	
妙見山	京都	前方後円	69 (114)	堅穴式石室	組合式石棺		21	28	2				43	1		15				小石室含む	
長法寺南原	京都	前方後方	40 (60)	堅穴式石室	割竹形木棺														3		
黒石5号?	奈良	前方後方	29 (50)	なし	木棺			24					4							2 一部混入可能性	
衛門戸丸塚	奈良	円	50	粘土被覆	木棺		19														
上殿	奈良	円	33	粘土被覆	割竹形木棺		33				10	1									
ホケノ山	奈良	前方後円	55 (80)	石囲い木槨	木棺			15	37											>30	
桜井茶臼山	奈良	前方後円	110(200)	堅穴式石室	割竹形木棺			2													
メスリ山	奈良	前方後円	128(224)	堅穴式石室			236														
東大寺山	奈良	前方後円	80 (140)	粘土被覆	木棺		177	47											22	15	
新沢500号(副槨)	奈良	前方後円	32 (62)	粘土被覆			1	24												2	
佐味田宝塚	奈良	前方後円	60 (112)	なし	木棺			1	7				13							2	
富雄丸山	奈良	円	109	なし	木棺			9													
小松	滋賀	前方後方	-60						4												
雪野山	滋賀	前方後円	40 (70)	堅穴式石室	舟形木棺		49	17			26	4									
安土瓢箪山	滋賀	前方後円	78 (134)	堅穴式石室	割竹形木棺		7												23		
追分	滋賀	円	38				>1	>4													
石山	三重	前方後円	70 (120)	なし	割竹形木棺		9	6	16	3		4								総計48点	
矢道長塚	岐阜	前方後円	65 (110)	なし	割竹形木棺		5													もと14点	
遊塚(前方部)	岐阜	前方後円	47 (80)	なし	木槨		4	29													
船来山24号	岐阜	円	20	?	?		15	1				1						4	9		
長坂二子塚	石川	前方後円	29 (50)	粘土被覆?	木棺?														2		
雨ノ宮1号	石川	前方後方	44 (64)	粘土被覆	割竹形木棺		55														
国分尼塚1号	石川	前方後方	28 (53)					9	45	3											
関野1号	富山	前方後円	34 (65)				2													もと約20点	
新豊院山1号	静岡	前方後円	17 (34)	堅穴式石室	組合式木棺		19		9												
松林山	静岡	前方後円	67 (107)	堅穴式石室	木棺		>16			50										もと80点	
赤門上	静岡	前方後円	36 (56)	なし	木棺		15				1										
馬場平(伝出土)	静岡	前方後円	33 (48)	なし	組合式木棺		3														
馬場平3号(伝出土)	静岡	円	20	なし?	?		2														
寺谷銚子塚	静岡	前方後円	58 (108)	?	?															総数2点	
谷津山	静岡	前方後円	70 (110)	堅穴式石室?	?															詳細不明	
秋葉山1号	静岡	円	10				1														
弘法山	長野	前方後方	33 (66)	堅穴式石室	箱形木棺		1														
川柳將軍塚	長野	前方後円	42 (91)	堅穴式石室	木棺?		17?														
高遠山	長野	前方後円	33 (51)	粘土被覆	組合式木棺		3			1											
真土大塚山	神奈川	?	?	?	木棺	35		1					4								
観音松	神奈川	前方後円	55 (100)	粘土被覆	割竹形木棺				3												
北作1号	千葉	方	18	?	?			1													
飯合作1号	千葉	前方後方	17 (25)	なし	木棺			2												混入かも	
椿3号	千葉	方	19	なし	木棺		1								1						
牛久1号	千葉	円	13						1												
能満寺	千葉	前方後円	43 (73)	木炭被覆	木棺		6													2	
手古塚	千葉	前方後円	35 (60)	粘土被覆	木棺		14													もと20点	
前橋天神山	群馬	前方後円	75 (129)	粘土被覆	木棺		4			26											
頼母子	群馬	前方後円?	?	粘土被覆	木棺		28				2										
矢場薬師塚	群馬	前方後円	50 (80)	粘土被覆	舟形木棺?					1											
成塚向山1号	群馬	方	21		舟形木棺		3														
行幸田山A区1号	群馬	方	26×21				2			4											
山王寺大掛塚	栃木	前方後方	48 (96)	粘土被覆	木棺					28											
駒形大塚	栃木	前方後方	32 (64)	木炭被覆	舟形木棺		3	2												1	
狐塚	茨城	前方後方	25 (44)	粘土被覆	木棺		1					3									
丸山	茨城	前方後方	34 (55)	なし	木棺					4											
城の山	新潟	円	45	なし	舟形木棺		7														
会津大塚山	福島	前方後円	45 (90)	なし	割竹形木棺		2	22											4	1	
				なし	舟形木棺			2											1	1	
計						36	1297	158	145	62	185	98	14	88	11	15	45	8	89	95	2346

墳丘規模の数値は、本体(前方部を持つ場合は後円部・前方部)の径または一辺の長さを示し。()内に前方部を含めた墳丘長を示す。銅鐏のタイプA~Mは図1に対応。

からの出土例は、福岡市五島山古墳から発見されたほぼ同形同大の5点（図2-8）のみで、個体数としては、倭の古墳時代銅鏃出土例のうちの0.22%にしかすぎない。

大成洞88号の他の2点は、三叉状に稜を研ぎだす有茎の「定角」のうち、先端が鈍角のタイプ（図2-6・7、図1-タイプJ）である。これもまた日本列島での類例は稀で、兵庫県の加古川市聖陵山古墳の同形同大の7点（図2-11）と姫路市御旅山3号墳のおそらく1点、および京都府向日市妙見山古墳の1点が知られるにすぎず、倭の古墳時代銅鏃出土例のわずか0.39%にとどまる珍品である。

大成洞古墳群を核とする金官加耶の墳墓に副葬された倭系の青銅製品や碧玉製品は、倭王権を核に授受された「威信財」として理解されている。上記の大成洞108号の47本の銅鏃タイプBにも、同じ理解が適用できよう。しかし、大成洞88号の2型式5点（タイプJ・M）はそうではなく、列島内でそれぞれ0.39%と0.22%を占めるにすぎない珍品で、しかも倭王権中枢の大和には存在しないタイプの銅鏃である。それが大成洞にもたらされている事実は、大成洞の倭系製品のすべてを、倭王権との通交という単純な事象のみによって理解することは不十分であることを示している。その背景をさらに検討してみよう。

大成洞88号の出土品のうち、縦横に直交する稜をもった「無茎三角」のタイプMの類品が福岡市五島山古墳にあることは先に述べた。ただし、五島山の5点（図2-8）が、身の下半部中軸に沿った着柄用の溝の底部に細い隆線をもつものに対し、大成洞の3点（図2-3～5）には同じ個所に隆線がない代わりに円形の小孔を穿つという違いがある。すなわち両者は同工品ではなく、五島山と大成洞との間で銅鏃のやり取りがあったとみるのは早計である。とはいえ、両者の密接な関連は明らかで、由来を同じくする可能性は高い。

このタイプの最大の特徴である縦横に直交する稜は、横稜より上位（先端寄り）を凸面に、下位（茎部寄り）を凹面に研ぎだす点で、有茎の「十字鎬柳葉」2型式（図1のタイプF・G）と同じ系統とみてよい。そこで、この有茎の2型式の分布数をみると、近江も含めた東海以東が倭全体の77%と東日本に偏り（表1）、大和には稀である。縦横に直交する稜をもつ最古の例が、愛知県朝日遺跡の弥生時代後期の包含層から出土した有茎の1点であることも、その起源が東海付近を最有力候補とする東日本にある可能性を示す。

無茎の銅鏃そのものは、弥生時代には山陰や北近畿の日本海沿岸に多く分布し、古墳時代には形状が整えられて、京都府木津川市椿井大塚山・同向日市妙見山など、中近畿でも北寄りの淀川水系に面した有力古墳に一定量が副葬される〔森井1983〕。また、瀬戸内沿岸や東日本にも点在する。この過程で、おそらくは東海付近において、その伝統であった縦横に直交する稜が付加されたものが、五島山や大成洞の例であろう。出土状況の不明瞭な類品1点が、伝・長野県神稲村出土として東海に近い伊那地方にあること（図2-9、〔永峯1952〕）も、その推定を支持する。

もう一つの支持材料は、五島山の5点とともに出土した3点の異形の銅鏃である（図2-10）。ほぼ同形同大で、短い茎部と長い逆刺をもった幅広の三角形をなし、中央に一つの小円孔をうがつか、こうした特徴をもった銅鏃は弥生時代後期の東海、なかでも渥美半島に集中的に分布して〔田中1986〕、その伝存品、あるいはその伝統を古墳時代に保って製作された品であるとみられる。このような明らかに中部産とみられる銅鏃と共伴する点からも、五島山の5点、および同じMタイ

プに属する大成洞の3点は、東海に由来する可能性が高い。

次に、大成洞88号の他の2点は、先述のように三叉状に稜を研ぎだす有茎の「定角」のうち、先端が鈍角のタイプ(図2-6・7, 図1-タイプJ)である。先に出土例をあげたように主な分布域は瀬戸内東部であり、中近畿では淀川水系の1点に限られ、大和にはない。さらに、このタイプと密接な関係をもつのが、まったく同じ身部の形状で基部を欠くタイプ(図1のタイプK)であるが、これも岡山県浦岡茶臼山古墳の15点と、同じ岡山県内の「平島村」および「福中堂山」で出たと伝えられる各1点に類例に限られる。さらに、まったく同じ形をした鉄鎌の分布が、この地方に集中する[野島1991, 高田1997]。大成洞88号のこの2点の類品や関連品が瀬戸内東部に集まるといふこのような事実は、それらの由来がこの地域にある可能性を示している。

三東洞甕棺墓の銅鎌 最後に、三東洞の2点(図2-1・2, [門田1985])は、倭の古墳時代銅鎌のうち「腸抉柳葉」の篋被(鎌身の下に付いた円柱状のこしらえ)のないタイプDに属する。このタイプを多数派として副葬する古墳は、奈良県天理市黒石5号、京都府与謝野町岩滝丸山、福島県会津若松市会津大塚山(南棺)の3例があるが、個体数としては、形態の判明している倭の古墳時代銅鎌出土例のうちの6.3%にとどまる。

製作地と流通経路 以上のように、加耶の銅鎌には、大成洞108号墳のタイプBのように、倭王権を核に授受された「威信財」として理解できるものと、大成洞88号墳のタイプJ・Mのように、そうとはみなしがたいものが混在している。後者の2タイプは、上記のように、形態的にはそれぞれ日本列島の東海と瀬戸内東部とに由来する。しかしそれらが、両地域で製作され金官加耶にもたらされた確証はない。

金官加耶から発見された銅鎌以外の「倭系遺物」の製作地については、石製鎌はもっぱら倭とされるが、筒形銅器と巴形銅器は倭と加耶の両説に分かれ、いずれかに絞りがたい[井上2014など]。少なくとも一部の銅鎌の製作地もまた、倭・加耶とも前代から続く青銅器生産の伝統がある限りは、理屈上は両地域いずれにもその可能性がある。

大成洞の2タイプのうち有茎の「定角」であるタイプJ2点は、身部の長さが50mmを超え、20～30mm台にとどまる瀬戸内東部の類品と比べると、群を抜いて寸法が大きい。この事実は、2点が瀬戸内地域から直接伝来したとの推測をややためらわせる。先にその由来を瀬戸内東部とした理由の一つは、同じ形態の鉄鎌がそこに多いことであるが、同種の鉄鎌は加耶にもあり、点数は加耶がはるかに多い。大成洞の2点が実は加耶産であったとのやや大胆な想定をもまた捨てがたくさせる事実である。

一方、縦横の稜をもつ無茎のタイプM2点は、加耶においては孤立した形態で、東海で作られたものが最終的に加耶に達したという推測がもっとも自然である。経路は実証しがたいが、同タイプの東海系銅鎌をもつ五島山古墳の性格が参考になる。

五島山古墳は、玄界灘に面した丘陵上にあり、大きな墳丘を持たず、埋葬施設も簡素な箱形石棺であった。農業共同体を支配してきた伝統的な在地有力首長ではなかったと考えられる。それにもかかわらず副葬内容は秀で、ここで詳しく見てきた計8点の東海系銅鎌のほか、良質の中国鏡2面をもつ。被葬者は、東海にゆかりをもちつつ、北部九州を拠点として海洋に臨み、物資や器物の取引に関わっていたような人物であろう。

おわりに

このような、いわば「民間」の流通網を経て、大成洞88号墳の無茎のタイプMは加耶に到来した可能性がある。有茎のタイプJも、加耶で作られたのでなければ、やはり同じような流通経路で瀬戸内東部から伝来したと想定できる。少なくとも、政治的背景をもって倭王権からじかに贈与された可能性がきわめて低いことは、説いてきた通りである。

「金官加耶」の倭系遺物の中には、大成洞108号墳の銅鏃47点のように、倭王権を核として政治的に贈与されたとみられるものもある一方で、大成洞88号墳の銅鏃5点のように、別のレベルのいわば「民間的な」流通経路で伝わったとみなすべきものもある。それぞれの資料を丁寧にみていくことで、倭と加耶との交流の実態を、さらにきめ細かく具体的に復元できるのである。

(松木武彦)

参考文献

- 安春培 1984『昌原三東洞甕棺墓』釜山女子大学博物館
井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社
大村直 1984「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』17号
亀井明德 1970「福岡県五島山古墳と発見遺物の考察」『九州考古学』38号
近藤義郎・新納泉編 1991『岡山市浦間茶白山古墳』浦間茶白山古墳発掘調査団
杉山晋作 1980「古墳時代銅鏃の二、三について」滝口宏先生古稀記念会編『古代探叢 滝口宏先生古稀記念考古学論集』第18回播磨考古学研究集会実行委員会 2017『武器からみた古墳時代の播磨』第18回播磨考古学研究集会資料集
大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群 85号墳～91号墳』博物館学術叢書第15冊
高田健一 1997「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』31号史学篇
田中勝弘 1986「銅鏃」金岡恕ほか編『弥生文化の研究9 弥生人の世界観』雄山閣
永峯光一 1952「長野県下伊那郡神稲村出土の銅鏃」『信濃』4巻7・8号
野島永 1991「鉄鏃」近藤義郎編『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会
松木武彦 1992「銅鏃の終焉—長法寺南原古墳の銅鏃をめぐる—」都出比呂志・福永伸哉編『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊
森井貞雄 1985「無茎銅鏃の分布とその意味」森浩一編『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII
門田誠一 1985「昌原三東洞遺跡出土の小型鏡と銅鏃」『古代学研究』107号

第6節 加耶史料集(稿)

本史料集は、韓国・中国・日本の古代史料のうち、加耶地域の国名や地名が網羅されているものを中心にして、韓国・中国・日本史料の順に配列したもので、必ずしも網羅的なものではない。これら加耶諸国についての史料群は、すでに6世紀において国が滅亡し、かつ以後継承した国が存在しなかったため、まとまった史料としては残されていない。残念ながら断片的な記載に依拠するしかない。それでも、日中韓三国の古代史料には記載が残されていることは注目される。韓国史料には、旧加羅諸国の国名や比定地が記載されている。中国側史料には、479年に加羅国王荷知が中国の南斉に朝貢し「輔国將軍本国王」に任命されたことが見え、国家的成熟を遂げ中国に認知されていたことが知られる。一方、『日本書紀』には、百濟からもたらされた「百濟本記」や氏族伝承を中心に加耶地域との交渉について記載が比較的多く残る。ただし、「任那日本府」などの倭国中心の記載が見られるように、解釈には慎重な史料批判が必要である。

◎于勒についての加耶琴の伝承、楽志には地名にちなむ十二曲の名前が列記される。

『三国史記』《新羅本紀》眞興王

◇十二年(中略)三月、王巡守、次娘城、聞于勒及其弟子尼文知音樂、特喚之。王駐河臨宮、令奏其樂。二人各製新歌奏之。先是加耶國嘉悉王製十二弦琴、以象十二月之律、乃命于勒製其曲。及其國亂、操樂器投我。其樂名加耶琴。王命居柒夫等侵高句麗、乘勝取十郡。

◎新羅人強首の出自は「任那加良人」と伝える

『三国史記』における唯一の「任那」地名記載

『三国史記』《列伝 第六》強首

◇及太宗大王即位、唐使者至傳詔書。其中有難讀處。王召問之、在王前一見說釋無疑滯。王驚喜、恨相見之晚、問其姓名、對曰、臣本任那加良人、名字頭。

◎加耶諸国の比定地が記される

『三国史記』《雜志 第三》地理一

◇古寧郡、本古寧加耶國。新羅取之、爲古冬攬郡一云古陵縣。景德王改名。今咸寧郡。領縣三。(以下略)

◇金海小京、古金官國一云伽落國。一云伽耶。自始祖首露王至十世仇亥王、以梁中大通四年、新羅法興王十九年、率百姓來降、以其地爲金官郡。文武王二十年、永隆元年、爲小京。景德王改名金海京。今金州。

◇火王郡、本比自火郡一云比斯伐。眞興王十六年置州、名下州。二十六年、州廢。景德王改名今昌寧郡。領縣一。(以下略)

◇咸安郡、法興王以大兵滅阿尸良國一云阿那加耶、以其地爲郡。景德王改名今因之。領縣二。(以下略)

◇高靈郡、本大加耶國。自始祖伊珍阿跋王一云内珍朱智至道設智王、凡十六世、五百二十年。眞興大王侵滅之、以其地爲大加耶郡。景德王改名。今因之。領縣二。(以下略)

◎「駕洛国記」に六伽耶の国名、「本朝史略」に五伽耶の国名

『三国遺事』《紀異 第一》五伽耶

◇按駕洛記贊云、垂一紫纓、下六圓卵。五歸各邑、一在茲城、則一爲首露王、餘五各爲五伽耶之王、金官不入五數當矣。而本朝史略、並數金官濫記昌寧誤。阿羅一作耶伽耶今咸安古寧伽耶今咸寧大伽耶今高靈星山伽耶今京山一云碧珍小伽耶今固城。又本朝史略云、太祖天福五年庚子、改五伽耶名、一金官爲金海府二古寧爲加利縣三非火今昌寧恐高靈之訛、餘二阿羅・星山同前。星山或作碧珍伽耶。

◎「駕洛國記」によれば、六伽耶の一つに（大）駕洛国がみえる

『三国遺事』《紀異 第二》駕洛國記

◇文廟朝、大康年間、金官知州事文人所撰也。今略而載之。（前略）屬後漢世祖、光武帝建武十八年壬寅三月、禊浴之日、所居北龜旨是峯巒之稱、若十朋伏之狀、故云也、有殊常聲氣呼喚。（中略）未幾仰而觀之、唯紫繩自天垂而着地。尋繩之下、乃見紅幅裏金合子。開而視之、有黃金卵六圓如日者。衆人悉皆驚喜、俱伸百拜。（中略）而六卵化爲童子。容貌甚偉。（中略）其於月望日即位也。始現故諱首露、或云首陵首陵是崩後諡也。國稱大駕洛、又稱伽耶國、即六伽耶之一也。餘五人各歸爲五伽耶主。（以下略）

◎五世紀における「任那加羅」の地名記載（400）

「高句麗広開土王碑」

◇（広開土王）十年庚子教遣步騎五萬住救新羅從男居城至新羅城倭滿其中官軍方至倭賊退自倭背急追至任那加羅從拔城城即歸服安羅人戍兵

◎「任那王族」の記載（924）

「鳳林寺真鏡大師宝月凌空塔碑文」

◇大師諱審希、俗姓新金氏、其先任那王族（中略）投於我國、遠祖興武大王（中略）携武略而高扶王室、□□終平二敵（後略）

◎倭国が請求した諸軍事号に「任那加羅」の国名

『宋書』夷蛮伝倭国

◇讚死、弟珍立、遣使貢獻。自稱使持節、都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王。表求除正、詔除安東將軍、倭國王。

◇（元嘉）二十八年（451）〔倭國王濟〕、加使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東將軍如故。

◇興死、弟武立、自稱使持節、都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王。

◇順帝昇明二年（478）、遣使上表曰、（中略）詔除武使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王。

『南齊書』東南夷倭国

◇建元元年（479）、進新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事、安東大將軍倭王。武號爲鎮東大將軍。

『梁書』東夷倭

◇興死、立弟武。齊建元中、除武持節、督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、鎮東大將軍。高祖即位、進武號征東將軍。

『南史』夷貊東夷倭

◇讚死、弟珍立。遣使貢獻、自稱使持節、都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王。

◇二十八年、加使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東將軍如故、并除所上二十三人職。

◇興死、弟武立、自稱使持節、都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王。

◇詔除武使持節、都督倭新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王。

◇齊建元中、除武持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、鎮東大將軍。梁武帝即位、進武號征東大將軍。

◎百濟の附庸国に加耶諸国の国名が見える

『梁職貢図』百濟国条題記（南京本）

◇旁小國有叛波・卓・多羅・前羅・斯羅・止迷・麻連・上巳（己）文・下枕羅等、附之（百濟）。

◎加羅国王荷知が中国に朝貢し「輔国將軍本国王」に任命される（479）

『南齊書』東南夷伝加羅国条

◇加羅國三韓種也。建元元年、國王荷知使來獻。詔曰、量廣始登遠夷洽化、加羅王荷知、款關海外、奉贄東遐、可授輔國將軍本國王。

◎『日本書紀』における任那の初見記事

『日本書紀』崇神天皇

◇六十五年秋七月、任那國遣蘇那曷叱知、令朝貢也。任那者去筑紫國、二千餘里、北阻海以在鷄林之西南。

◎「任那王」「意富加羅国王子」都怒我阿羅斯等の来朝記事

『日本書紀』垂仁天皇

◇二年（中略）是歲、任那人蘇那曷叱智請之、欲歸于國。蓋先皇之世來朝未還歟。故敦賞蘇那曷叱智。仍齎赤絹一百匹、賜任那王。然新羅人遮之於道而奪焉。其二國之怨、始起於是時也。一云、御間城天皇之世、額有角人、乘一船、泊于越國苜飯浦。故號其處曰角鹿也。問之曰、何國人也、對曰、意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等。亦名曰于斯岐阿利叱智干岐。傳聞日本國有聖皇、以歸化之。到于穴門時、其國有人、名伊都々比古、謂臣曰、吾則是國王也。除吾復無二王。故勿往他處。然臣究見其爲人、必知非王也。即更還之。不知道路、留連嶋浦、自北海廻之、經出雲國至於此間也。是時遇天皇崩。便留之、仕活目天皇逮于三年。天皇問都怒我阿羅斯等曰、欲歸汝國耶。對語、甚望也。天皇詔阿羅斯等曰、汝不迷道必速詣之、遇先皇而仕歟。是以、改汝本國名、追負御間城天皇御名、便爲汝國名。仍以赤織絹給阿羅斯等、返于本土。故號其國謂彌摩那國、其是之緣也。於是、阿羅斯等以所給赤絹、藏于己國郡府。新羅人聞之、起兵至之、皆奪其赤絹。是二國相怨之始也。

◎「卓淳国」の地名が見える

『日本書紀』神功皇后

◇卅六年春三月乙亥朔、遣斯麻宿禰于卓淳國。斯麻宿禰者、不知何姓人也。於是、卓淳王末錦早岐、告斯麻宿禰曰、甲子年七月中、百濟人久氏・彌州流・莫古三人、到於我土曰、百濟王、聞東方有日本貴國、而遣臣等、令朝其貴國。故求道路、以至于斯土。若能教臣等、令通道路、則我王必深德君王。時謂久氏等曰、本聞東有貴國。然未曾有通、不知其道。唯海遠浪嶮。則乘大船、僅可得通。若雖有路津、何以得達耶。於是、久氏等曰、然即當今不得通也。不若、更還之備船舶、而後通矣。仍曰、若有貴國使人來、必應告吾國。如此乃還。爰斯麻宿禰即以倭人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百濟國、慰勞其王。時百濟肖古王、深之歡喜、而厚遇焉。仍以五色綵絹各一匹、及角弓箭、并鐵鋌卅枚、幣爾波移。便復開寶藏、以示諸珍異曰、吾國多有是珍寶。欲貢貴國、不知道路。有志無從。然猶今付使者、尋貢獻耳。於是、爾波移奉事而還、告志摩宿禰。便自卓淳還之也。

◎加羅七国の平定伝承

◇卅九年春三月、以荒田別・鹿我別爲將軍。則與久氏等、共勒兵而度之、至卓淳國、將襲新羅。時或曰、兵衆少之、不可破新羅。更復、奉上沙白・蓋盧、請增軍士。即命木羅斤資・沙々奴跪、【是二人、不知其姓人也。但木羅斤資者、百濟將也。】領精兵、與沙白・蓋盧共遣之。俱集于卓淳、擊新羅而破之。因以、平定比自【火本】・南加羅・【喙】國・安羅・多羅・卓淳・加羅、七國。仍移兵、西廻至古奚津、屠南蠻忱彌多禮、以賜百濟。於是、其王肖古及王子貴須、亦領軍來會。時比利・辟中・布彌支・半古、四邑、自然降服。是以、百濟王父子及荒田別・木羅斤資等、共會意流村。【今云州流須祇。】相見欣感。厚禮送遣之。唯千熊長彦與百濟王、至于百濟國、登辟支山盟之。復登古沙山、共居磐石上。

◎「加羅國王」妹既殿至の來朝記事

◇六十二年、新羅不朝。即年、遣襲津彦擊新羅。百濟記云、壬午年、新羅不奉貴國。々々遣沙至比跪令討之。新羅人莊飾美女二人、迎誘於津。沙至比跪、受其美女、反伐加羅國、々々々王己本早岐、及兒百久至・阿首至・國沙利・伊羅麻酒・爾汶至等、將其人民、來奔百濟。百濟厚遇之。加羅國王妹既殿至、向大倭啓云、天皇遣沙至比跪、以討新羅。而納新羅美女、捨而不討。反滅我國。兄弟人民、皆爲流沈。不任憂思。故、以來啓。天皇大怒、即遣木羅斤資、領兵來集加羅、復其社稷。

◎新羅王が任那王に「日本府行軍元帥」膳臣斑鳩・吉備臣小梨・難波吉士赤目子らの救援を請う

『日本書紀』雄略天皇

◇八年春二月、遣身狹村主青・檜隈民使博德使於吳國。自天皇即位、至于是歲、新羅國背誕、苞苴不入、於今八年。（中略）高麗王即發軍兵、屯聚筑足流城。或本云、都久斯岐城。遂歌舞興樂。於是、新羅王、夜聞高麗軍四面歌舞、知賊盡入新羅地。乃使人於任那王曰、高麗王征伐我國。當此之時、若綴旒然。國之危殆、過於累卵。命之脩短、太所不計。伏請救於日本府行軍元帥等。由是、任那王勸膳臣斑鳩斑鳩、此云伊柯屢娥。・吉備臣小梨・難波吉士赤目子、往救新羅。膳臣等、未至營止。高麗諸將、未與膳臣等相戰皆怖。（中略）悉軍來追。乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之。二國之怨、自此而生。言

二國者、高麗新羅也。膳臣等謂新羅曰、汝以至弱、當至強。官軍不救、必爲所乘。將成人地、殆於此役。自今以後、豈背天朝也。

◎倭国が百済王に賜った久麻那利は、「任那国下哆呼喇県之別邑」とする記載

◇廿一年春三月、天皇聞百済爲高麗所破、以久麻那利賜汶洲王、救興其國。時人皆云、百済國、雖屬既亡、聚憂倉下、實賴於天皇、更造其國。汶洲王蓋爾王母弟也。日本舊記云、以久麻那利、賜末多王。蓋是誤也。久麻那利者、任那國下哆呼喇縣之別邑也。

◎「任那日本県邑」から百済への移住命令（509）

『日本書紀』繼體天皇

◇三年春二月、遣使于百済。百済本記云、久羅麻致支彌、從日本來。未詳也。括出在任那日本縣邑、百済百姓、浮逃絶貫、三四世者、並遷百済附貫也。

◎「任那四県」の割讓記事（512）

◇六年（中略）冬十二月、百済遣使貢調。別表請任那國上哆喇・下哆喇・娑陀・牟婁、四縣。哆喇國守穗積臣押山奏曰、此四縣、近連百済、遠隔日本。且暮易通、鷄犬難別。今賜百済、合爲同國、固存之策、無以過此。然縱賜合國、後世猶危。況爲異場、幾年能守。（中略）物部大連、方欲發向難波館、宣勅於百済客。其妻固要曰、夫住吉大神、初以海表金銀之國、高麗・百済・新羅・任那等、授記胎中譽田天皇。故太后息長足姫尊、與大臣武內宿禰、每國初置宮家、爲海表之蕃屏、其來尚矣。抑有由焉。縱削賜他、違本區域。綿世之刺、詎離於口。大連報曰、教示合理、恐背天勅。其妻切諫云、稱疾莫宣。大連依諫。由是、改使而宣勅。付賜物并制旨、依表賜任那四縣。（中略）於是、或有流言曰、大伴大連、與哆喇國守穗積臣押山、受百済之賂矣。

◎「伴跛国」が「己汶之地」を略奪したとの百済の主張（513）

◇七年夏六月、百済遣姐彌文貴將軍・洲利即爾將軍、副穗積臣押山、百済本記云、委意斯移麻岐彌。貢五經博士段楊爾。別奏云、伴跛國略奪臣國己汶之地。伏願、天恩判還本屬。

◎百済国に「己汶・滯沙」を与え、「伴跛国」には与えなかった（513）

◇七年（中略）冬十一月辛亥朔乙卯、於朝庭、引列百済姐彌文貴將軍、斯羅汶得至、安羅辛已奚及賁巴委佐、伴跛既殿奚及竹汶至等、奉宣恩勅。以己汶・滯沙、賜百済國。是月、伴跛國、遣戢支獻珍寶、乞己汶之地、而終不賜。

◎「伴跛国」は「己汶・滯沙」に倭国に備え城を築き、「爾列比・麻須比」に城を築き新羅を攻める（514）

◇八年（中略）三月、伴跛築城於小呑・帶沙、而連滿奚、置烽候邸閣、以備日本。復築城於爾列比・麻須比、而緝麻且奚・推封。聚士卒兵器、以逼新羅。駟略子女、剥掠村邑。凶勢所加、罕有遺類。夫暴虐奢侈、惱害侵凌、誅殺尤多。不可詳載。

◎「伴跋人」の暴虐に対抗して物部連が「帶沙江」に侵攻する（515）

◇九年春二月甲戌朔丁丑、百濟使者文貴將軍等請罷。仍勅、副物部連、闕名。遣罷歸之。百濟本記云、物部至々連。是月、到于沙都嶋、傳聞伴跋人、懷恨銜毒、恃強縱虐。故物部連、率舟師五百、直詣帶沙江。文貴將軍、自新羅去。

◎「伴跋」の攻撃により物部連が「帶沙江」から「汶慕羅」嶋へ退却する（515）

◇九年（中略）夏四月、物部連於帶沙江停住六日。伴跋興師往伐。逼脫衣裳、劫掠所齋、盡燒帷幕。物部連等、怖畏逃遁。僅存身命、泊汶慕羅。【汶慕羅嶋名也。】

◎近江毛野臣が任那に出兵し「南加羅・喙己吞」を回復し任那との併合を計画し、筑紫磐井は任那国等の朝貢船を誘致した（527）

◇廿一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣、率衆六萬、欲住任那、爲復興建新羅所破南加羅・喙己吞、而合任那。於是、筑紫國造磐井、陰謀叛逆、猶預經年。恐事難成、恆伺間隙。新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍。於是、磐井掩據火豐二國、勿使修職。外邀海路、誘致高麗・百濟・新羅・任那等國年貢戰船、內遮遣任那毛野臣軍、亂語揚言曰、今爲使者、昔爲吾伴、摩肩觸肘、共器同食。安得率爾爲使、俾余自伏爾前、遂戰而不受。

◎新羅が抄掠した四村の名前が本伝と別伝に見える（529）

◇廿三年夏四月（中略）是月、遣使送己能末多干岐。并詔在任那近江毛野臣、推問所奏、和解相疑。於是、毛野臣、次于熊川、一本云、次于任那久斯牟羅。召集新羅・百濟、二國之王。新羅王佐利遲遣久遲布禮、一本云、久禮爾師知于奈師磨里。百濟遣恩率彌騰利、赴集毛野臣所、而二王不自來參。毛野臣大怒、責問二國使云、以小事大、天之道也。（中略）由是、新羅改遣其上臣伊叱夫禮智干岐、新羅、以大臣爲上臣。一本云、伊叱夫禮智奈末。率衆三千、來請聽勅。毛野臣、遙見兵仗圍繞、衆數千人、自熊川、入任那己叱己利城。伊叱夫禮智干岐、次于多々羅原、不敬〈敢〉歸待三月。頻請聞勅。終不肯宣。（中略）乃以所見、具述上臣。上臣抄掠四村、金官・背伐・安多・委陀、是爲四村。一本云、多々羅・須那羅・和多・費智爲四村也。盡將人物、入其本國。或曰、多々羅等四村之所掠者、毛野臣之過也。

◎毛野臣を攻め「久礼牟羅城」および「騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳」の五城を攻略した（530）。

◇廿四年（中略）秋九月、任那使奏云、毛野臣、遂於久斯牟羅、起造舍宅、淹留二歲、一本云、三歲者、連去來歲數也。懶聽政焉。爰以日本人與任那人、頻以兒息、諍訟難決、元無能判。毛野臣樂置誓湯曰、實者不爛。虛者必爛。（中略）乃遣調吉士、率衆守伊斯枳牟羅城。於是、阿利斯等、知其細碎爲事、不務所期、頻勸歸朝、尚不聽還。由是、悉知行迹、心生讎背。乃遣久禮斯己母、使于新羅請兵。奴須久利、使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來、迎討背評。背評地名。亦名能備己富里也。傷死者半。百濟、則捉奴須久利、桎械枷鎖、而共新羅圍城。責罵阿利斯等曰、可出毛野臣。毛野臣、嬰城自固。勢不可擒。於是、二國圖度便地、淹留弦晦。築城而還。號曰久禮牟羅城。還時觸路、拔騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳、五城。

◎任那四県の記載 (539)

『日本書紀』欽明天皇

◇元年(中略)九月乙亥朔己卯、幸難波祝津宮。大伴大連金村・許勢臣稻持・物部大連尾輿等從焉。天皇問諸臣曰、幾許軍卒、伐得新羅。物部大連尾輿等奏曰、少許軍卒、不可易征。曩者、男大迹天皇六年、百濟遣使、表請任那上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁、四縣。大伴大連金村、輒依表請、許賜所求。由是、新羅怨曠積年。不可輕爾而伐。(中略)今諸臣等謂臣滅任那。故恐怖不朝耳。乃以鞍馬贈使、厚相資敬。青海夫人、依實顯奏。詔曰、久竭忠誠。莫恤衆口。遂不爲罪、優寵彌深。

◎諸早岐が任那諸国から招集され百濟に赴く。任那のうち卓淳・喙己吞・加羅らの諸国は新羅と境を接するという (540)

◇二年(中略)夏四月、安羅次早岐夷吞奚・大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻早岐、散半奚早岐兒、多羅下早岐夷他、斯二岐早岐兒、子他早岐等、與任那日本府吉備臣、闕名字。往赴百濟、俱聽詔書。百濟聖明王謂任那早岐等言、日本天皇所詔者、全以復建任那。今用何策、起建任那。盡各盡忠、奉展聖懷。任那早岐等對曰、前再三廻、與新羅議。而無答報。所圖之旨、更告新羅、尚無所報。今宜俱遣使、往奏天皇。夫建任那者、爰在大王之意。祇承教旨。誰敢問言。然任那境接新羅。恐致卓淳等禍。等謂喙己吞・加羅。言卓淳等國、有敗亡之禍。

◎百濟は昔、安羅・加羅・卓淳早岐等と通交した (540)

◇二年(中略)聖明王曰、昔我先祖速古王・貴首王之世、安羅・加羅・卓淳早岐等、初遣使相通、厚結親好。以爲子弟、冀可恆隆。而今被誑新羅、使天皇忿怒、而任那憤恨、寡人之過也。我深懲悔、而遣下部中佐平麻鹵・城方甲背味奴等、赴加羅、會于任那日本府相盟。以後、繫念相續、圖建任那、且夕無忘。今天皇詔稱、速建任那。由是、欲共爾曹謨計、樹立任那國。宜善圖之。又於任那境、徵召新羅、問聽與不。乃俱遣使、奏聞天皇、恭承示教。儻如使人未還之際、新羅候隙、侵逼任那、我當往救。不足爲憂。然善守備、謹警無忘。別汝所導、恐致卓淳等禍、非新羅自強故、所能爲也。其喙己吞、居加羅與新羅境際、而被連年攻敗。任那無能救援。由是見亡。其南加羅、叢爾狹小、不能卒備、不知所託。由是見亡、其卓淳、上下携貳。主欲自附、內應新羅。由是見亡。因斯而觀、三國之敗、良有以也。昔新羅請援於高麗、而攻擊任那與百濟、尚不剋之。新羅安獨滅任那乎。今寡人、與汝戮力并心、翳賴天皇、任那必起。因贈物各有差。忻々而還。

◎諸早岐が任那諸国から招集される (544)

◇五年(中略)十一月、百濟遣使、召日本府臣・任那執事曰、遣朝天皇、奈率得文・許勢奈率奇麻・物部奈率奇非等、還自日本。今日本府臣及任那國執事、宜來聽勅、同議任那。日本吉備臣、安羅下早岐大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚・卒麻君・斯二岐君・散半奚君兒、多羅二首位訖乾智、子他早岐、久嗟早岐、仍赴百濟。於是、百濟王聖明、略以詔書示曰、吾遣奈率彌麻佐・奈率己連・奈率用奇多等、朝於日本。詔曰、早建任那。又津守連奉勅、問成任那。故遣召之。當復何如、能建任那。請各陳謀。吉備臣・任那早岐等曰、夫建任那國、唯在大王。欲冀遵王、俱奏聽勅。

◎総称としての任那と任那十国の国名（562）

◇廿三年春正月、新羅打滅任那官家。一本云、廿一年、任那滅焉。總言任那、別言加羅國・安羅國・斯二岐國・多羅國・卒麻國・古婁國・子他國・散半下國・乞瀆國・稔禮國、合十國。

◎新羅が任那を滅亡させる（562）

◇廿三年（中略）冬十一月、新羅遣使獻、并貢調賦。使人悉知國家、憤新羅滅任那、不敢請罷。恐致刑戮、不歸本土。例同百姓。今攝津國三嶋郡埴盧新羅人之先祖也。

◎任那四邑の名前が見える（575）

『日本書紀』敏達天皇

◇四年六月、新羅遣使進調。多益常例。并進多々羅・須奈羅・和陀・發鬼、四邑之調。

◎新羅は任那の六城を割讓して降伏した（600）

『日本書紀』推古天皇

◇八年（中略）是歲、命境部臣爲大將軍。以穗積臣爲副將軍。並闕名。則將萬餘衆、爲任那擊新羅。於是、直指新羅、以泛海往之。乃到于新羅、攻五城而拔。於是、新羅王、惶之舉白旗、到于將軍之麾下而立。割多々羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南迦羅・阿羅々六城、以請服。時將軍共議曰、新羅知罪服之。強擊不可。則奏上。爰天皇更遣難波吉士神於新羅。復遣難波吉士木蓮子於任那。並檢校事狀。爰新羅・任那、二國遣使貢調。仍奏表之曰、天上有神。地有天皇。除是二神、何亦有畏乎。自今以後、不有相攻。且不乾船舵。每歲必朝。則遣使以召還將軍。將軍等至自新羅。即新羅亦侵任那。

◎任那と倭国の歴史を語る（645）

『日本書紀』孝徳天皇

◇大化元年秋七月（中略）丙子、高麗・百濟・新羅、並遣使進調。百濟調使、兼領任那使、進任那調。唯百濟大使佐平縁福、遇病留津館、而不入於京。巨勢德太臣、詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長。是故、可以温和之心、相繼往來而已。又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠祖之世、以百濟國、爲內官家、譬如三絞之綱。中間以任那國、屬賜百濟。後遣三輪栗隈君東人、觀察任那國堺。是故、百濟王隨勅、悉示其堺。而調有闕。由是、却還其調。任那所出物者、天皇之所明覽。夫自今以後、可具題國與所出調。

◎三国と任那が遣使朝貢（646）

◇（大化）二年（中略）二月（中略）高麗・百濟・任那・新羅、並遣使、貢獻調賦。

◎任那の調を廃止した（646）

◇（大化）二年（中略）九月、遣小徳高向博士黑麻呂於新羅、而使貢質。遂罷任那之調。黑麻呂、更名玄理。
(仁藤敦史)

仁藤敦史（国立歴史民俗博物館研究部）

松木武彦（国立歴史民俗博物館研究部）

上野祥史（国立歴史民俗博物館研究部）

高田貫太（国立歴史民俗博物館研究部）

（2023年5月22日受付，2023年7月25日審査終了）